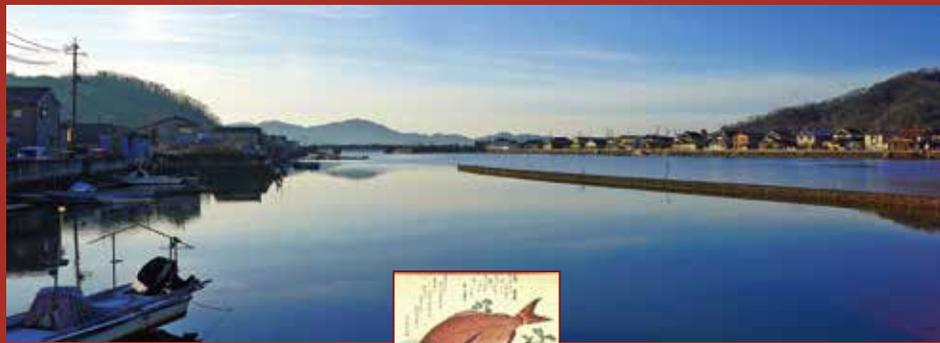


備中とと道トレイル

笠岡—矢掛—美星—成羽—吹屋
全60km完全ガイド



備中とと道トレイル推進協議会編集





備中とと道トレイルガイド目次



目次	P 2
会長挨拶	P 3
とと道全図	P 4
高梁、笠岡市長ご挨拶	P5～6
「吹屋往来の賑わい」(田村 啓介 氏)	P7～8
「とと道」物語(宮本 邦男 氏作)	P9～10
とと道探索と推進協議会設立まで	P11
地区別とと道主要探索概要	P12
①瀬戸内コースガイド(笠岡-小田川)	P13～23
②里山コースガイド(小田川-三山)	P24～32
③吉備高原コースガイド(三山-成羽)	P33～39
④吹屋山岳コースガイド(成羽-吹屋)	P40～48
別冊地図の内容と使い方	P49
会員募集案内	P50
コラム目次+あとがき	P51

備中とと道トレイルMAP (別冊) 目次

1. 笠岡・金浦→笠岡・甲弩
拡大図 4 枚
2. 矢掛・小田→美星・毛野
拡大図 3 枚
3. 美星・毛野→成羽・上日名／保木上橋
拡大図 3 枚
4. 成羽・上日名→成羽 拡大図 3 枚
成羽→吹屋 拡大図 2 枚



ヒト、備中を歩きぬく

「アフリカの草原に住んでいる動物はたくさんいるのに、ただの一度も直立二足歩行なんて進化しなかった。でも、人類は700万年前、初めて直立二足歩行を進化させた。それは、おそらく食料を手で運んで子を育てるためだった」（絶滅の人類史 NHK出版新書 更科 功著）。

かくて家族が誕生し、250万年前には石器を使うホモサピエンス＝ヒトが現れました。ヒトは二足歩行の利点を活かして長い距離を歩き、狩猟をし、（石器で切り刻んだ）肉を食べ、その滋養で脳を進化させました。

ヒトの原点にふれた興味深い記述です。食料を求めて歩き回った結果、縦横につけられた「道」はヒトとは切っても切れない何よりの相棒となり、ヒトはこの道を歩き続けてきました。ところがその道は今ではほとんどが車が走るための道に変わりつつあります。おかげでヒトはその存在の最大の特性である直立二足歩行の舞台を失いつつあります。つまり、ヒトは700万年にわたって維持してきた自らの特徴の一部を、直近の100年にも充たない期間で放棄しつつあるとも言えるのです。

そこで突然ですが「とと道」です。明治から昭和にかけて、銅とベンガラ景気で湧く吹屋銅山での宴会用に瀬戸内海で穫れた新鮮な鱒（さわら）や鯿（ぶり）を届ける60km近い道がありました。魚仲仕（うおなかせ）と呼ばれる屈強な運送人たちが40kgほどの魚を天秤棒で担いでその道を歩き、笠岡の金浦市場から駅伝方式で12時間かけて吹屋まで運んでいました。

しかし、60年ほど前から輸送はヒトから車に変わり、とと道は森の中に放置され、どこに有ったかさえ分らないほどになりました。それが数年前、あるきっかけから備中の森の中で再び姿を見せることになりました。

備中各地の好事家による探索を総合した結果2019年末には全コースが一本の道としてつながり、草刈り等の整備もされ（夏はさすがに藪に埋もれます）、ヒトが再び歩けるようになりました。出発点の笠岡とゴールの吹屋が日本遺産に選ばれたこともあり、今では2つの日本遺産を繋ぐ唯一の歩く道としての貌も持つことになりました。獲物を手に持って家族の待つ巣へ向かうヒトとしての自らの原点の確認の場としても絶好の舞台です。

このガイドブックでは道中の様々な歴史や文化のみどころもできる限り紹介しました。歩きながら、読みながら、備中の歴史と文化を満喫しつつ、改めてヒトの相棒＝道に親しみ、備中の背骨を歩きぬいてください。

備中とと道とレイル推進協議会
会長 小見山 節夫



金浦魚市場で夕方競り落とされた鮮魚は夜の9時に出発。丸い竹籠に入れて天秤棒の両端に吊るされた魚荷は40kgほどもあった。5～6人が一組となって、小田、三山、成羽を經由、途中6ヶ所ほどの中継所で次の運送人へと引継ぎながら運ばれ、都合12時間、翌朝の9時には吹屋に到着した。

吉備高原の山坂をいとわず、ほぼ一直線に北上する厳しいルートで、魚仲仕の賃金は一般の日雇い賃金の5倍ほど（明治25年頃、日雇い賃金4銭に対し20銭、三山から成羽へは26銭＋米3合分の現金）もあったといわれる。

この道、当時は多くの人に踏み固められていつでも歩けた。しかし、一旦ヒトから見放された今はそう簡単ではない。当協議会では役員の平均年齢からあと4年は毎年11月中に全コースの草刈りを実施することで合議している。ということで、歩くのは12～5月の冬から春をお勧めしたい（毎年12～1月には協議会主催で公開ウォークを開催予定）。

発刊によせてー北から

高梁市長 近藤 隆則

「このたび、備中とと道トレイル推進協議会会員並びに関係者の皆様方のご尽力により、備中とと道トレイルガイドブックが増補改訂され、新たに上梓されますことを心からお喜び申し上げます。

成羽町吹屋は、江戸中期から明治にかけて国内有数の生産量を誇った吉岡銅山や国内随一の弁柄（赤色顔料）の産地として繁栄した鉾山町でした。また、備後東城（現庄原市）と備中成羽を結ぶ往来の中継地点にも位置し、各種物資の集散地として大いに賑わい、財力を蓄えた各商家等は石見（現島根県西部）から宮大工や瓦職人を招請し、競うように優れた意匠の町家を建築しました。そうした地域の人々の活発な営みの中で形成されたのが「赤い町並み」の景観で、令和2年6月に「ジャパンレッド発祥の地」一弁柄と銅の町・備中吹屋として日本遺産に認定されました。

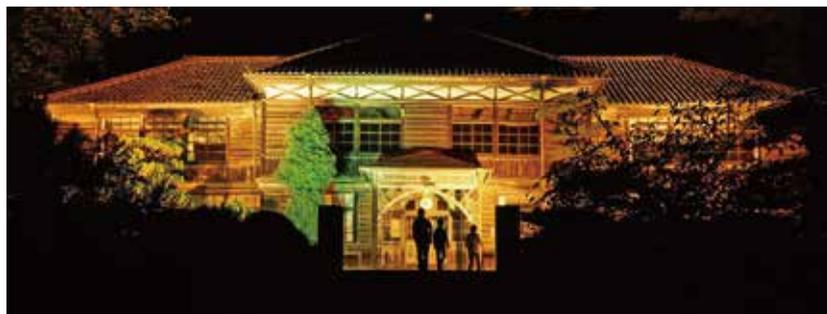
旧吹屋往来では、東城周辺の鉄や吹屋産の銅、弁柄などが牛馬で成羽へ輸送され、成羽河岸から高瀬舟で玉島港へ下され、全国市場へ出荷されました。また、山間部の吹屋で貴重であった塩などの海産物は、玉島や笠岡から吹屋へ運ばれました。特に、吹屋の豪商たちの求めにより、笠岡からは夜を徹して駅伝方式で鮮魚を運んだことから吹屋往来は「とと道」とも呼ばれ、瀬戸内海と内陸部を運ぶ重要なルートの役割を担いました。そうした歴史的背景から、平成19年3月には「吹屋往来 とと道」として、国から街道文化の創出を目的とした「夢街道ルネッサンス認定地区」に選ばれています。

現在は吹屋から成羽までの一部が認定されていますが、貴協議会の活動が活発化することで道が広く認知され、今後、吹屋から笠岡までのとと道全体の認定に繋がれば、更なる地域間の連携や交流、歴史・文化・自然を生かした地域づくりが進んでゆくものと期待しております。

また、貴協議会をはじめ、関係地域の皆様方の活動では、笠岡市金浦から吹屋までのルートの探索及び整備に取り組み、各地域で大切に保存されてきた歴史的文化資源がとと道とつながり、実際に歩けるトレイルとして復元されました。

この道は笠岡の「知ってる！？悠久の時が流れる石の島～海を越え、日本の礎を築いた瀬戸内諸島～」と「ジャパンレッド発祥の地」の吹屋の両日本遺産をまっすぐにつなぐ道であるという点においても大変意義深く、新ガイドブックの発刊が郷土備中への愛着と誇りの醸成や地域の活力向上、賑わいの創出など大きな成果に繋がるものと考えております。

結びに、今回のガイドブックの増補改訂にあたり、貴協議会の皆様や、ご協力をいただきました関係者の皆様方に心からお礼を申し上げますとともに、備中とと道トレイル推進協議会の今後益々のご発展と、会員各位の一層のご活躍とご健勝を祈念いたします。



発刊によせてー南から

笠岡市長 小林 嘉文

このたびは、『備中とと道トレイルガイドブック』増補改訂版の御発刊を心よりお祝い申し上げます。

明治の頃、瀬戸内海で捕れた鮮魚を西浜（笠岡市金浦）から小田、美星、成羽を通り、12時間かけて吹屋まで運んでいたという話を聞いた時には驚きました。「魚仲仕」と呼ばれる運搬役は、約6回の駅伝方式で60kmの道のりを踏破し、新鮮なサワラやブリを吹屋の銅山まで届けていたといえます。笠岡の人々と吹屋の人々が、同じ港に水揚げされた魚介類を食べていたと考えるだけで、両者の距離が一拳に縮まった思いがいたします。



「とと道」のルートは、山坂を踏み越えてゆく険しいものでした。内陸の地域に最速で鮮魚を運び届けた先人達の労苦が偲ばれます。そのルート上を歩いてみると、今でも道標やお堂など、様々な痕跡が残っています。

しかし、この幻の道を、備中とと道トレイル推進協議会の皆様が再発見し、ルートを特定されるまでにはたいへんご努力があったものと拝察いたします。ある時には草に覆われた道を切り開き、ある時には関係者への聞き取りをするなどして、ついには地図を完成させ、ウォーキングを開催されたことにより、多くの方々に「とと道」の存在が認知されてきました。長年のお取り組みによって、ついに「とと道」が復活したとも言えます。これも関係各位のご尽力の賜物であると、心より敬意を表する次第です。



「とと道」は主要道とは異なる古道です。それだけに、実際に「とと道」を歩くことによって、これまで知らなかった地域の歴史を学んだり、先人たちの感覚を体感することができるのも楽しみの一つです。そんな時には、このガイドブックが大いに役立ってくれることでしょう。

また「とと道」は笠岡市、矢掛町、井原市、高梁市を通っています。「とと道」の復活によって、関係市町がまた一つ結束を強めたことは、たいへん意義深いものと存じます。今後も「とと道」が備中地域を結びつける歴史の道として、末永く語り継がれていくことを願ってやみません。

終わりになりますが、備中とと道トレイル推進協議会の今後益々の御発展、皆様方の御活躍と御多幸を祈念いたしまして、お祝いのことばといたします。



笠岡・白石島

吹屋往来の賑わい

高梁市教育委員会 田村 啓介

吹屋往来は、かつて成羽村と吹屋村を結んだ旧道です。その道筋は、現在の総門橋北詰（高梁市成羽町成羽）を起点とし、島木川西岸を北上、東枝の急斜面を上り尾根沿いに宇治後谷から吹屋下谷を経由して吹屋（高梁市成羽町吹屋）に至ります。路傍には、道標の役割も担った牛馬供養塔や常夜灯、辻堂などが残っています。さらに、吹屋からは郷迫・梶平と急斜面を坂本まで下り、辰口八幡神社から尾根筋を上山田まで上り、かつての郡境を越えて八鳥（現新見市哲西町八鳥）に至ります。「八鳥馬子」が活躍した中継問屋場の雰囲気の色濃く残る町並みから往来は分岐し、神代川に沿って北東へ進むと、矢田・上神代・下神代を経て新見へ、また西へ進むと二本松峠を越えて備後国東城（現庄原市）に達します。

さて、標高約500メートルの吉備高原上に位置する吹屋は、周知のごとく銅と弁柄の生産で繁栄した地域です。吹屋の吉岡銅山は、大同2年（807）の開坑とされ、平安時代中期に編纂された「延喜式」主税寮に記載される備中国産の銅は、当銅山産ともいわれます。戦国時代には、尼子氏と毛利氏の間で銅山の争奪戦が展開され、その後は備中国奉行小堀氏、成羽藩山崎氏の支配を経て幕府の直轄地（天領）となりました。この間、地元大塚家や大坂・江戸などの商業資本が短期間に交替で請負稼業しましたが、天和元年（1681）からは泉屋（後の住友）が請け負い、坑道内の湧水を排水する大疎水坑道を掘削するなどして産銅量は激増し、西日本屈指の銅山となりました。この吹屋産の銅は、「御用銅」として吹屋往来を成羽河岸まで駄馬輸送され、同所から高瀬舟に積み込み高梁川を下し、玉島から大坂銅座役所へ廻送されました。また、多数の銅山労働者が必要とする食糧をはじめとする日用物資や塩などの海産物、さらに製錬作業の燃料となる薪炭は、逆に吹屋へ駄馬輸送され、こうした銅山に関係する様々な物資が行き交った吹屋往来は、人馬の流れが途絶えることのない備中北部地域で最も賑わった往来であったと推察されます。

一方、赤色顔料である弁柄の生産は、銅鉱石とともに産出された硫化鉄鉱石を原料として、江戸時代中期の宝永4年（1707）に始まったとされます。硫化鉄鉱石を焼成して緑礬（硫酸鉄の結晶）を凝結させ、それを窯で焼成、水槽で不純物を除去して石臼で粉成、脱酸工程・天日乾燥を経て赤い微粉末状の弁柄（酸化第二鉄を主成分）となります。宝暦元年（1751）の本山鉱山での硫化鉄鉱石の鉱脈発見を契機として、吹屋の胡屋（片山家の屋号）ほか地元5軒の弁柄業者による株仲間が結成され、本格的な生産体制が整備されました。弁柄は、陶磁器・漆器の顔料や建築・船舶の防腐塗料などとして重用され、銅などの物資と同様に吹屋往来を介して全国市場に出荷されました。これにより、吹屋の弁柄生産は銅山に次ぐ新たな地場産業としての地位を確立することとなりました。



また、備後東城を含む中国山地一帯は、古来より砂鉄製錬である「たたら製鉄」の稼業地として知られ、「山内」と呼ばれる製鉄場で荷作りされた「小割鉄（包丁鉄ともいう）」（棒状の鉄製品）は、駄馬により吹屋を経由して市場へと輸送されました。



吹屋の本長尾（長尾家の屋号）は鉄問屋を営み、現在でも同家の蔵には鉄荷に付けた木簡状の荷札が多く残されています。このように、吹屋は銅と弁柄の生産地として繁栄した鉾山町であるとともに、備後東城と備中成羽を結ぶ東城・吹屋往来の中継地点に位置することから、様々な物資の集散地としても大いに賑わい、往来沿いには弁柄窯元、酒・醤油の醸造業者、旅籠、料理屋、鍛冶屋、米や魚、呉服、雑貨などの日用の諸物資を扱う各種問屋や商家が軒を連ね、街村を形成することとなりました。

こうしてみると、江戸時代の吹屋往来は、備中北西部における物資輸送の幹線であり、まさに「銅の道」「弁柄の道」「鉄の道」とも呼称すべき重要な往来であったといえます。

さらに、明治6年（1873）には岩崎弥太郎の三菱商会が吉岡銅山を買収し、その巨大な資本力と外国の先進技術導入による近代的経営を展開しました。明治26年（1893）には、主要な三番坑道の出口である麓の坂本村に銅山事務所や製錬所などの施設を移転し、明治36年（1903）に県内初の水力発電所を成羽川上流の笠神（現高梁市備中町平川）に建設し、その電力により坑道内の湧水を排水するポンプを作動させ、鉾石運搬の動力化・選鉾作業の機械化・洋式溶鉾炉の導入など、製錬過程の効率化・近代化を図り、明治後期から大正期にかけて国内有数の銅山となりました。

一連の近代化の中で、明治41年（1908）には田原（現備中町湯野）～成羽間に原料や製品を輸送する銅山専用軌道（トロッコ道）が敷設され（大正8年には田原～坂本間も開通）、旧来の吹屋往来による駄馬輸送に替わる大量輸送が可能となりました。

また弁柄は、明治10年（1877）に開催された「第1回内国勸業博覧会」において「一等褒状」を授与され、国内での地位を確立し、全国市場を独占しました。まさに、この時期が吹屋の全盛期であり、吹屋往来沿いの各種商家は、競うかのように優れた意匠の町家を建築しました。吹屋下谷地区から下町・中町・千枚地区に至る家々は、屋根を赤褐色の瓦で葺き、弁柄塗りの格子を統一的に採用することにより、他に例を見ない「赤く彩られた町並み」が形成されたのです。

しかし、第一次世界大戦後の世界恐慌の影響を受け、昭和6年（1931）には吉岡銅山が閉山となり、第二次世界大戦後の昭和25年（1950）に三菱系列の「吉岡鉾業所」として再開されましたが、昭和47年（1972）には完全に閉山となり、吹屋の銅山の歴史は幕を閉じました。また弁柄も、戦後の化学肥料生産の副産物である酸化鉄から作られる安価な「工業用ベンガラ」が主流となり、伝統的な製法（緑礬弁柄）を続ける吹屋の弁柄業者は次々と廃業に追い込まれ、遂に昭和49年（1974）最後の弁柄工場が廃業・閉鎖となりました。

以上、吹屋地域の繁栄を支えた銅山と弁柄の栄枯盛衰と、吹屋往来が担った歴史的役割を概観しました。当該地域は、戦後の高度経済成長の中で人口減少が続き、さらに過疎化・高齢化が進展し、町並みの維持・管理が課題となりました。そうした厳しい状況の中で、地元の方々は、昭和49年「岡山県ふるさと村」の指定、同52年（1977）「重要伝統的建造物群保存地区」の選定に取り組み、吹屋の栄華を物語る「赤く彩られた町並み」を何とか残されました。

さらに令和2年（2020）には、「赤く彩られた町並み」をテーマとした「ジャパンレッド発祥の地-弁柄と銅の町・備中吹屋-」が日本遺産に認定されました。この全国あるいは世界に誇り得る貴重な遺産を構成する文化財には、銅鉾石の採掘が体感できる「笹畝坑道」や選鉾場の遺跡が確認できる「吉岡銅山跡」、最後の弁柄工場を復元した「ベンガラ館」などとともに、吹屋の繁栄を支えた「旧吹屋往来」が含まれています。日本遺産認定を契機として、かつて備中北部の幹線道として多くの人々が行き交い、様々な物資が運搬された「旧吹屋往来」そして「とと道」の歴史的価値が再認識されることを心から期待しています。



美星・徳山牧場を行く

トト道 (魚) 道

宮本邦男

川のせせらさがほとんど耳に入らない程の短時間には、小川へ歩幅の間隔で置かれた「飛び」(踏み石、飛びともいった。)の上を魚仲仕の若者が走って渡って行った。彼の肩には先ほど三山(現在の美里町)で受け渡いだすっしりと重い鯛や鯖(たこ)の入った約十貫の魚籠が「おうこ」(荷を担ぐための棒)一本で担がれている。

時代は江戸から明治に変わったばかりであった。笠岡を夜の九時に出発して字内(現在の矢掛町)の坂を越えて運んだ仲間の魚仲仕は、夜通し七時間走り続けて夜明けの四時に三山へ着いた。小田川を渡った途中の宿場で休む暇などなかった。高尾差約300米の字戸越えを終えて三山へ入った仲間は精魂尽きてしばらく立ち上がることもできなかつた。道が平坦なときはほとんどなかつたが、それでも仲間内でいつの頃からか歌われている唄が途切れ途切りに彼の口からこぼれた。



字内つの坂の途中からの字内川流域のながめ はるかかなたに笠岡が……



飛び (踏み石)

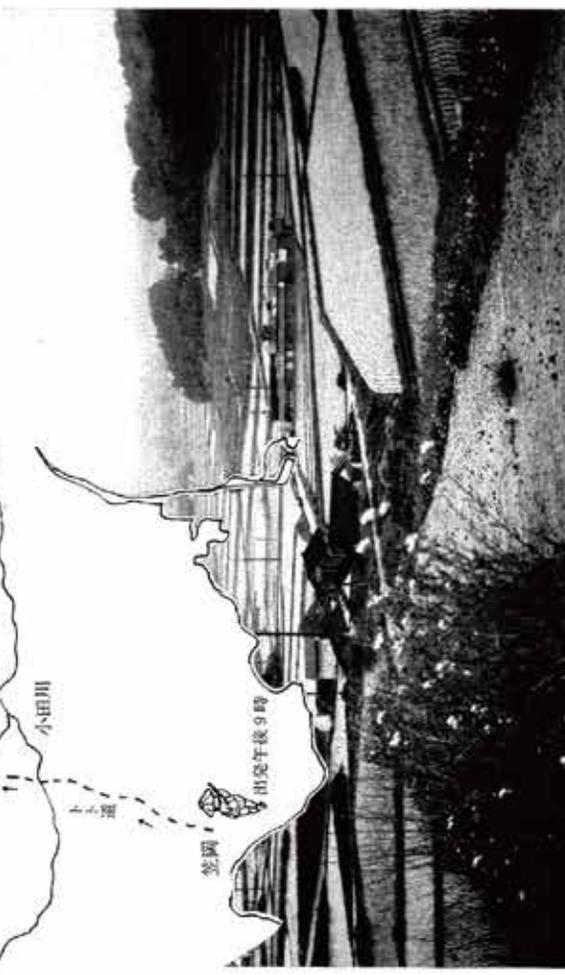
魚仲仕にどこがようて惚れた
尻の振りようと足の軽さよ ヨーホー ヨイヨ
足も軽いが お尻も黒い
お隣のお尻が願掛けだ ヨーホー ヨイヨ

魚仲仕の青年や参度(他人の物資の買い物を請け負う職業の人)が頻りに通っても、小川へ達すると必ずそこへ設けられている「飛び」が大ききされることはなかつた。主要道ではあっても、歩くのが当たり前前の江戸時代から明治時代の終わりにかけての道路は一人歩いて通ればよかつた。小田川を始めとする主な川には橋もなかつた。

川筋につけられた道は川の氾濫でしばしば途絶してしまふので、トト(魚)道に限らないがこの頃の道は安定な山の尾根伝いがほとんどであった。川沿いで谷間と尾根とを連絡する道は少しでも速く走れる最短距離で結ばれるのを好まれたので、急な坂道が多かつた。

三山から成羽へ抜ける道は三里(約12キロ)と少いのであるが、これから彼が越えなければならぬ羽山道に比べれば楽であった。平坦な所もあれば下り坂もあつた。川の流れるも変わった。水は三山から南では小田川へ流れているが、三山を分水嶺として北へ向けて成羽川へと流れている。

下日名(成羽町)の飛びを越えるとき、彼は清流で手拭いに水を含ませると顔を拭いた。肩に食い込む「おうこ」の棒が角質化して石のようになっていた。



三山 (成羽町)

彼は飛びの平らな石の上へ置いた魚籠の蓋を取って中をのぞいた。鯛の鱗(うろこ)がとれたり、鯛のいぼが無くなるのが心配であった。以前に所用で奥から里へ出てきた人が、鯛にいぼがあるのを見て驚いたという話がこの地方で広まって以来、いぼの落ちた鯛は生きの悪い証しのようになって具合が悪くなってしまう。

そこで、青年が世話になっている魚仲仕問屋では特に鯛に気をつけるようにいわれている。山中を走るときでも極力揺すらないようにしなければならなかった。ブリのような魚は腹が割れるので気を遣った。

成羽を走り抜ける頃には、返りもすっかり明るくなった。青年が走り始めて二時間に達しようとしていた。朝の九時頃には吹屋へ届けなければならぬ。笠岡を出発してから十二時間で届けるのが魚仲仕の使命であった。

魚は鮮度が勝負、吹屋へ運べば口の悪えた山長(やおおさ・龜山主)や横番(孫蔵夫)が高く買ってくれる。この若者が世話になっている三山の魚仲仕問屋は成羽に中継所を持たなかった。従って青年は保本の坂を越えて成羽へ入っても吹屋めざして走り続けなければならなかった。

成羽から吹屋へ達するトト道は、成羽の古町から東枝の坂道を上って羽山溪の尾根道を通り、柴原から宇治、並尾、下谷を通って海拔550米の吹屋へと達する約四里の道のりであった。羽山溪谷は島木川が遙か下を流れる石灰岩の断崖で、この当時は人が通行できるところではなかった。

この時刻になるとトト道を走る魚仲仕の数も増えてきた。下津井、玉島などから出発して途中の峠や谷間を抜け、受け継がれて羽山の尾根道を上るのである。海産物も種類が豊富であった。魚介類に加え、塩や海草も運ばれてきた。

東枝から羽山溪の尾根道にかけてが猿にとっても困難な道であった。急な坂を登らなければならぬ上に、堅い石灰岩の石ころがわらわらへ食い込んできた。宇戸谷から道を覚えて松山(高梁)へ向かう仲間の魚仲仕がうらやましいと思ったこともあったが、それでも、午後五時まで走り続けて新見へ向かう仲間のことを思うと慰めになった。

それに走りながら食べる朝食の温かい飯の後は、

石灰岩の間を通って濡ってくる冷たい清水が彼を待っていた。そして、雪割り草、一輪草、二輪草、大和れんぎょう等が春の訪れとともに咲いては消えていって季節を教えてくれるのも楽しかった。

この日は彼は吹屋へ九時を少し回った頃到着した。背中の鯛のいぼも無事であった。

無事に鯛と鯛を小売り商へ届けた彼は再びもとの道を通って笠岡へ急がなければならなかった。そして、彼の背中の魚籠には家へのみやげの五合の米と備北でとれた川魚が担がれていた。

吹屋は田植えを終えた近郷の入道の買い物客で賑わっていた。

抱いて寝ようとするや、くるりと回る

痴心がまだ失せぬ

ヨ一ホ一 ヨイヨ

痴心は失せてはおるが

わたしやお前のかかしやない。

ヨ一ホ一 ヨイヨ

彼の口からは、無事に仕事をし終えた安堵感と、下り坂の多い帰路であることから、自然に仲仕頭が聞こえるようになっていた。



吹屋の町並

あとがき

成羽町史を継承したとき、僅か数行ではあったがトト道について次のように書かれていたのに強い興味を覚えた。

「かつて古老に聞いた話であるが、足自慢の若者が、夜半に笠岡を出て、宇戸谷を経て、保本の坂から成羽へ駆けつけた。成羽で引き継がれた魚は、羽山街道を上って吹屋へ運ばれたという。今では、魚を運んだ往時の経験者もなく、さだかではないが、山中の吹屋での最高のご馳走は海の魚、いわゆる「トト」であった。したがって、吹屋へのこの道を「トト道」といった。」(成羽町史民俗編P221)

京都三大祭りの一つ、葵祭に欠かせない若狭の奉納(さば)を運んだ鯖街道はあまりにも有名である。その鯖街道は十八里(70キロ余り)、調べてみるとそれと匹敵するか、それ以上の規模のトト道が、高梁川の支流の小田川と成羽川を横切ってはほぼ北に向けて新見・上布方面まで有った。

このトト道を調べるために多くの高齢の方にお会いしたが、人の記憶を頼りにするには月日があまりにも経ちすぎているのを感じざるを得なかった。

例えば、日名下でお尋ねしたかった方は90歳を過ぎておられ、期待したのだったが、トトをその日の朝食べたか昼だったか分からないとのことであった。しかし、ここでは探しても探しても見つからなかった飛び石が見つかるという幸運が待っていた。

飛び石自体が少なくなってしまうのである。その理由は既に整備されたことよって無用化したことよって考えられがちであるが、私がお会いした美星町下郷の81歳の原田さんの考えは違っていた。川の流ればすぐに激流となり、ものすごい勢いで石でも何でも押し流してしまおう」とのことであった。土地の整備や自然林の消失によって斬水能力を失ってしまった結果、雨は一度に川を下ってしまうとのことでした。

トト道が背後を走り、前に小川のある原田さんの家は車の赤を轆ぐ水車があったのかか生活がかつてであった。しかし、現在は普段小川にほとんど水が流れなく、大きくめぐり取り取られた川底が露出して見えるのみなのである。

魚仲仕の仕事は吹屋銅山の盛衰と比例して栄えたり衰えたりしたが、吹屋に11軒の小売り店があった明治後期には、吹屋には20~30人の仲仕が入りしだしてきている。

魚仲仕は過激な労働であったから、報酬も普通の日雇い賃金の約5倍程度であった。深夜、トト道沿いの民家に響き渡っていた魚仲仕の足音と魚仲仕頭も大正末期には聞こえることがなくなった。信濃線の開通で魚仲仕の役が終わったからである。

[総社市誌1214-13]

● 仲つき道
— 魚仲仕の道



美星町内の魚仲仕の道 美星町史より

備中とと道とレイル探索と推進協議会設立経緯

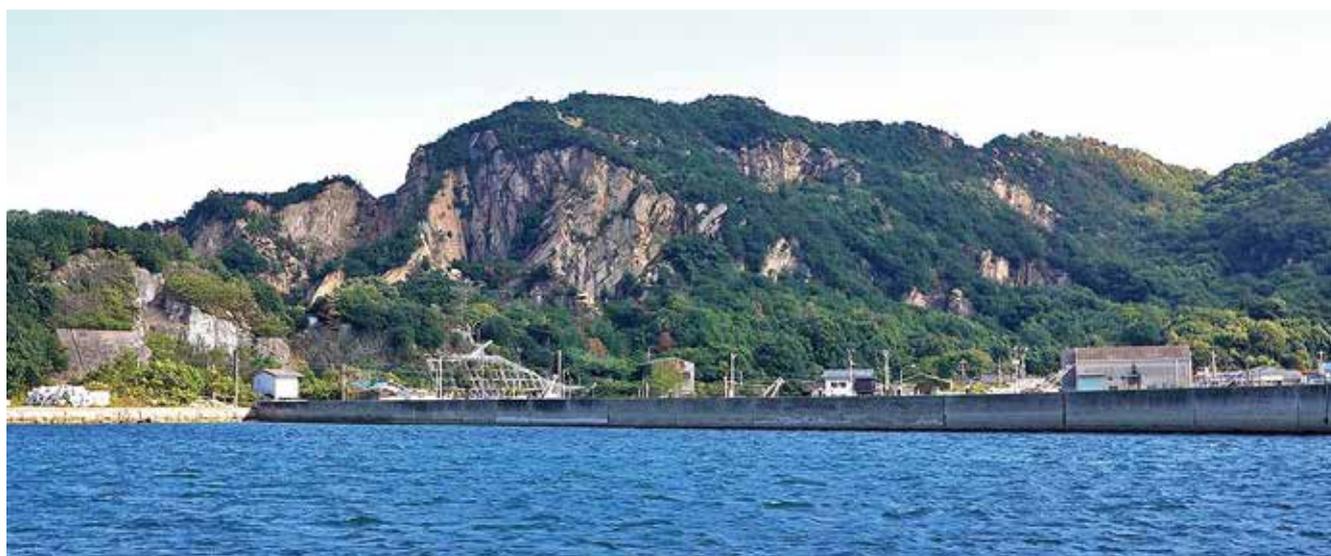
平成4年(1992)7月	「高梁川流域の自然」第3号に宮本邦男「トト(魚)道」発表。
平成6年(1994)	岡山県歴史の道調査報告書第7集「牛窓往来・吹屋往来」発表。
平成9年(1997)	「高梁川」55号に堀省三氏「玉川橋は見た」発表。笠岡の鮮魚が宇土谷から玉川橋を渡り高梁迄搬送されていたことを報告。
平成20年(2008)	笠岡の森山上志、塩田宏之氏とと道調査開始。
平成22年(2010)	森山、塩田氏「高梁川」68号に「明治期の魚荷道追跡の試み」発表。
平成25年(2013)	高梁の小見山節夫氏、成羽-吹屋間で吹屋往来「とと道」の探索開始。
平成26年(2014)6月8日	高梁川流域学校設立
平成28年(2016)6月	高梁川流域学校事務局より「備中矢掛宿の街並をよくする会」の金子晴彦宛 金浦-成羽ルートの調査依頼有り。 矢掛の「どんぐり写真クラブ」の守屋和幸氏の紹介で笠岡の森山、塩田氏よりそれ迄の調査詳細を聴取。
8月2日	高梁川流域学校、笠岡、矢掛メンバーで笠岡-三山ルート探索
10月23日	同メンバーで成羽-吹屋ルート探索。吹屋観光協会戸田誠氏がガイド。
10月29日	高梁川流域学校、シンポジウム「歩くことではじめて分ること-高梁川トレイルの可能性-吹屋往来&とと道の事例から」(吉備国際大学)開催。 成羽文化協会会長 官尾雅彦氏講演、森山氏調査報告。
平成29年(2017)2月6日	矢掛・宇内と美星・毛野を結ぶとと道遺構を発見。 笠岡-吹屋間の全コースの位置がほぼ特定される。
5月13日	とと道調査報告会(やかげ町家交流館)
5月20日	高梁川流域トレイル推進協議会設立総会(成羽町文化センター) 流域学校校長 神崎宣武氏 講演「備中のまとめり」
5月23日	推進協議会備西支部発足(会長 森山上志・25名)。 美星町文化財同好会(会長 池尻雄策)等が探索活動に参加。
平成30年(2018)1月14日	第1回とと道一般公開ツアー実施(瀬戸内+里山コース 参加18名)
令和2年(2020)7月28日	備中とと道とレイル推進協議会設立総会 会長 森山上志氏
9月27日	同上発会式(会員125名 内73名参加) 高梁市近藤市長挨拶。 教育委員会参与 田村 啓介氏「吹屋往来と日本遺産」講演。
令和3年(2021)12月1,18日	一般公開ウォーク実施。
令和4年(2022)1月15,22日	一般公開ウォーク実施。 } (227名参加)
6月26日	総会開催 会長 小見山節夫氏に交代

とと道主要探索概要

瀬戸内コース (笠岡・金浦 ～小田川)	助実への道	吉田川沿いのルートを想定したが、地元での聞き取りによれば、吉田川沿いは断崖がありかつては道を作れなかったため尾根越えの道が選ばれていたとのこと。以後地元有志の協力を得て、毎年草刈りを実施。
	スポーツ公園 どんぐり球場への下り	野球場整備のために山の8割ほどの土砂が削りとられ、そこに有ったと道は消失した。しかし2022年春、市役所のはからいにより、2割残った西側部分に改めて踏み跡を復元することが認められた。往時の雰囲気少しでも残したいとの地元メンバーの熱意の成果だ。
	走出新賀線への道	とと道は走出と新賀を結ぶ細長い丘陵の稜線伝いに続くが、岩神池から先のどこを登って稜線に出るのかの特定が困難だった。最終的にはいくつかの候補の中から地元メンバーの判断で決めた。
里山コース (小田川～三山)	小田市街の道	町の姿は長い間に化する。小田市街の場合にはこれに往年の井笠鉄道の軌道跡の町づくりがからんでくる。多くの方から詳細情報をいただき、現時点で考えられるとと道遺構を特定した。
	日置谷の遺構	中小田から日置谷にかけては山裾や田んぼの中を通る遺構が多い。道路工事や住宅地造成などで環境が変わり、新たに歩けるようになり、逆に歩けなくなったりする場所がある。遺構も生きている。地元メンバーによる日頃の現地確認が不可欠。
	角坂	宇内から始る角坂は蛇行する車道に分断されながらほぼ直線的に北へ登っている。登りの最後になる角坂池の東側が深い藪におおわれており、池の南の土手を通って県道に出る迂回路をとっていたが数度に渡る草刈りで直上する遺構を特定した。
	まぼろしの県道	角坂を越え毛野に至る一帯は竜王山の急な斜面を登ることになる。4本程度の道が想定されたが、どのルートも笹藪と倒木でおおわれ上下に通じ抜けられる道の特定は困難を極めた。しかし、初回で発見された毛野の二股道標を基軸に探索を続け、4回目ようやく上下がつながり、その後の大規模な草刈りで現在のルートが特定された。他の候補遺構も上下通じる可能性はあるものの森があまりに深く現状に留めている。
吉備高原コース (三山～成羽)	とと道	美星は生産地と消費地のほぼ中間に位置しており、道はここから東、北、西へと分岐していた。このためとと道をどのルートに特定するかが焦点となったが、あくまで成羽迄直行する道ということで日名川沿いの北上ルートを選んだ。
	徳山牧場	かつてのとと道遺構は牧場の下の建物から北へ進み、川を渡り、あぜ道を通り、斜面を登って、現在の四方位道標地点に出ていたとのこと。現在は敷地内に入れられないため舗装道路に行く。
	あずきもち	この部分の道は簡易舗装でおおわれているものの藪がひどく、大掛かりな伐採が必要となった。
	日名川沿い	深い谷と固い岩盤ということで道を作れる場所は限定され、とと道遺構はほぼ舗装道路と重なっている。下日名では一部往時の遺構を迎える。
吹屋山岳コース (成羽～吹屋)	東枝、西枝地区	ひたすら最短距離で吹屋を目指すことを基本に、古老の記憶を聞き取り、ほかの地区同様石仏、辻堂、牛馬供養碑、常夜灯、石の道標等を頼りにルートを探した。成羽町と福地地区の境界線上での3等3角点の発見でとと道と判断したが、実はとと道はその下方50mほどにできた大型農道に吸収されていることが判明した。一部窓坂前後のとと道が藪に埋もれながらも残っており地元有志が重機を導入して整備した。
	宇治への山道	1間巾の山道が続くが倒木が多く、これも地元の有志が重機をもって整備した。高圧線の北にある二股からの道は東西に通る松山往來と、北へ向うとと道遺構が森の中で交錯している。北へ向う道は後谷に下る最後の坂が、伐採された大量の樹木で歩行困難なため、地元有志が西側を迂回する道を整備した。
	石田地区	五輪塔から先になると田んぼのあぜ道の様な所を進む。島木川沿いになり、谷が狭まり正面に堰堤が現れた地点で、島木川の自然岩盤でできた「とびそ」伝いに対岸に渡る。無事渡ったら、集落の中を北へ抜け、次の橋で対岸に戻る。
	吹屋下谷への道	笹尾城址の先から長い急坂が始る。9～11月末の時期は山林保有者の私権保護のため入山が禁止されており、県道85号線に下って吹屋下谷に入る。

①瀬戸内コース（笠岡・金浦→小田川）

ガイド 番 号	主要ポイント	全行程ウォークプラン			部分ウォーク+ 車伴走プラン	
		km	所要時分	備考	移動手段	所要時分
1-1	浜の住吉神社	3	60		車乗車	15
1-6	大河東橋					
1-8	助実地区聖地					
1-10	大戸口三方位道標	2.5	50	トイレ有り	ウォーク	40
1-14	岩神様					
1-17	とと道遺構入り口	3	50	トイレ有り	車乗車	15
1-18	ときわヴィレッジ					
1-22	ききな峠	1.5	30	トイレ有り	ウォーク	50
1-29	茶堂跡	2	30			
1-32	小田川辻橋跡	2	40		車乗車	20
				合 計	ウォーク	90
					車乗車	50
	合 計	14	4:20			2:20



1. 浜の住吉神社

JR山陽線が吉田川を渡る鉄橋のすぐ南側の海際に浜の住吉神社がある。須屋の台座には「魚方中、明治27年(1894)3月17日」の刻字がある。「オシグランゴ」の祈願祭の折には須屋の中に八大龍王の御幣を祭って祭典が行われる。

2. 西浜（ようすな）の旧船着き場

西浜は、靈龜元年（715）から漁渚郷（「いおすな」あるいは「ようすな」ごう）と称し、当時から漁業が盛んだった。戦国時代、毛利氏が笠岡へ入場した際、当時の西の浜（現 西本町西・笠岡駅周辺）の軍事的重要性に気付き、西の浜の漁師を村をあげて漁渚郷（現 金浦町）へ移住させた。その際、村の名前の文字表記は移住元の「西浜」を使ったもののそれに「ようすな」との読みを当て現在に至っている。

太閤秀吉の朝鮮出兵の折に水先案内をした功により、「日本国中の漁労勝手たるべし」との太閤の感状を受け、他の地域の漁船と識別するために舳先を赤く塗った。これを赤舳（あかみおし）という。これを受け継いだ西浜の漁船の舳先には赤金（銅）が巻かれていた。明治22年（1889）西浜、生江浜、吉浜、木之目、大河の5ヶ村が合併し、金浦町となった。

3. 金浦魚市場跡

西浜の魚の販売額は尾道をしのぐ時期もあり明治35年（1902）4月西浜漁業組合が設置された。魚佐、魚柳（うおりゅう）、魚善、魚大、かねく、伏権（ふしごん）の6軒の大きな魚問屋があった。山陽線の線路脇には今でも金浦魚市場跡がある。

■魚を入れて運んだととかご

このととかごは高さ30cm、巾40cm。ひとつのかごに20kgほどの魚を入れたという。これを天秤棒（おうこ）で前後に担ぎ運んでいた。

■金浦の漁獲内容

大正5年の記録では金浦での主要魚の水あげ量、売上は次のとおり。

つなし（このしろ）	21トン、5040円=1500万円	@720円/kg
海老、蟹	16トン、3500円=1050万円	@59円/kg
ちぬ	12トン、4650円=1400万円	@1163円/kg
いな、ぼら	5トン、1230円=370万円	@738円/kg
あなご	2トン、630円=190万円	@945円/kg

* 当時の1円＝現在の3000円程度？

上記合計は現在価値で4510万円。この5種の魚の比率は金浦の水あげ量の3割程度であり、金浦の水あげ全体の売上げは1.5億円程度と想定される



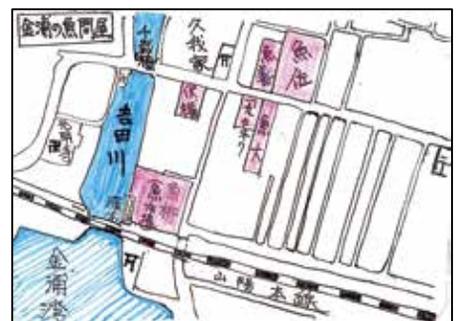
浜の住吉神社



船着き場と金浦港



金浦魚市場跡



昭和20年頃の金浦の魚問屋の地図



おうこはよくたわみ、リズムに乗って踊るようになり、重みが肩にかからないものを用いた。

他方、西浜魚市場では出買（でがい）という、金浦以外の港から買い求めてきた魚も取引されており取扱い合計は3億円となっている。つまり、金浦の魚市場の取扱いの半分は地元で捕れた魚介、それ以外は出買連中が瀬戸内海沿岸の他の港（朝鮮物まで含む）や海上の漁船から買い集めてきた魚介が取引されていたということになる



漁方中



出買連中

4. 久我邸

新川沿いの久我家は近世から近代にかけて、庄屋や戸長（こちょう・明治以降の呼び名）など地方行政に貢献し、多くの文化人を出した豪商。

現在の母家は寛延年間（1750頃）に建てられたもの。



吉田川沿いの久我邸と旧船着き場

5. 吉浜干拓記念碑

とと道は魚市場から新川（吉田川）沿いに大河東橋まで一気に北上する。途中信号機のある交差点を過ぎると右手に須屋が現れる。かつて海だったこの一帯の干拓工事を記念して寛政9年（1797）に設置された吉浜干拓記念碑である。吉浜西国33ヶ所第4番霊場も祀られている。

この一帯はかつては魚渚郷（いおすなごう）とよばれ、深く入り組んだ入海だった。今から360年ほど前の寛文元年（1661）、福山藩はその入り口に500mほどの土手を築き107町歩（107ha）の新田が完成した。しかし、水はけが悪くたびたび浸水し、稲作には適さなかった。このため、ヒツタカを行う東西の山の間を新たに開削し、寛文11年（1671）に南北1.5kmの新川床をつくり、吉田川の流れをそこに付け替え、水はけを改善し、今に至っている。



明治時代の吉浜一帯



吉浜干拓記念碑

6. 大河東橋

この須屋を過ぎ、山陽新幹線高架下を通り抜け、吉田川沿いを北上する。山陽自動車道の橋脚を見上げるようになって右折すると金浦地区と東大戸地区の境になる大河東橋に出る。橋を渡り吉田川左岸沿いの土手道を進み、巨大な山陽自動車道高架橋の右端の橋脚付近をくぐる。



吉田川沿いに行く

7. 畑の中のとと道遺構

橋脚の下を過ぎると右手に丘陵の斜面が伸び上がる。とと道は吉田川を背にしてこの斜面に切り開かれた急な草道を登って行く。何故吉田川沿いのゆるやかな道ではなく、急な坂を登るのだろうか？と不思議に思う登りである。土地の人によれば、吉田川ぞいは両岸が崖となって迫り、道が作れなかったとのとである。



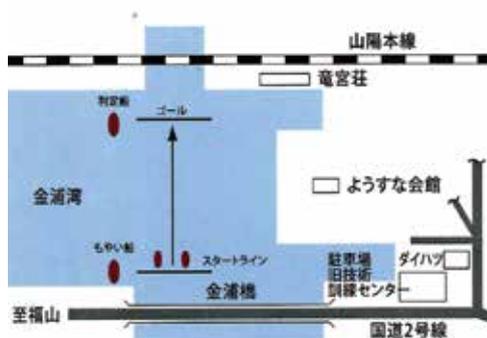
川から丘へ

金浦のヒッタカとオシグランゴ

一ノ谷の合戦で敗走した平家が西浜(ようすな)で再起をはかっていたところ(1184年)源氏方が海から攻撃、陸の平家方は山一帯にかがり火を焚いて大軍と見せかけ源氏を寄せ付けず、海では平家方10数隻で源氏方30数隻を追い散らしたという。

以来村人は湾の東の行者山と西の妙見山で松明を焚き競うようになった。明治以降は杉丸太で組まれた骨組(カタ)に、「せと大はし」(昭和41年西の山)などの大きな図柄を細竹で作ってくりつけ、それ沿いに350個ほどの提灯を吊るし、夜空を飾った。「火を高く焚く」がなまり「ヒッタカ」と呼ばれた。これは農民間の対抗であったので久我邸の東隣に有る田方神社が祭神となった。他方、海では源平の海戦にならい、若者が紅白に分かれて新造船に乗り「オシ(櫓を押し)グランゴ(競争)」という勇壮な競漕を展開した。これは漁師間の対抗であったので浜の住吉神社が祭神になったという。

途中一時イベント中断の時期も有ったが、今では毎年5月の節句のころ、笠岡市民は土曜日の夜はヒッタカ、日曜日の昼はオシグランゴを楽しんでいる。両事業は笠岡市の重要無形民俗文化財に指定されている。



資料提供 黒田基晴

道と道標と辻堂

3世紀初期に著された魏志倭人伝に日本の当時の「道」についての記述が有る。「土地は山陰しく森林が多く、道路は禽鹿(きろく)の径(獣道)の如し」と紹介されている。日本の道はまるで手つかずの自然に近い踏み跡と見たのだと思われる。その後日本書紀に「東の蝦夷を使役して、厩坂道(うまやさかのみち)を作らせた」との記事があり、日本における「道」についての最初の記事となっている。律令制国家における駅制をもって古代駅路が全国的規模で建設され、道路が発展、人の交流も頻繁となる。

これに伴い当然、休息あるいは宿泊の施設が必要となり、目的的には「休み堂」、位置的には「辻堂」なる概念の建物が誕生する。別称としては外観からは四つ堂、内部の神仏の違いによって仏教関係はお堂、大師堂(主に弘法大師)、地藏堂、薬師堂、観音堂、毘沙門堂と言った呼び名があり、神社関係では祠堂、氏堂などと呼ばれている。辻堂によっては敷地に地神、萬人講、地藏碑等の石像物が有り、それが道標にもなっている例が多い。道と道標と辻堂。旅人にとっては目的地に向かって歩くのに不可欠な機能であり、とと道トレイルを歩きながら是非目を向けていただきたい。

ミニ霊場ととと道

笠岡には市内全域で40を超えるミニ霊場コースが有る。ミニコース発祥の原点とされる神島霊場は1744年に設置されており、古いものでは元禄時代、新しいものでは昭和初期と長期にわたって盛衰を繰り返してきている。寛政10年(1798)に設置された笠岡新四国88ヶ所は南の遍照寺1番から北の安養寺45番まで笠岡市全体を広くカバーしている。中で北川昭和新四国88ヶ所のコースは6kmほどにもわたってとと道と重なっている。笠岡以外の地域にもこうしたミニ霊場はいくつもあり、とと道はあちこちで多くのミニコースと重複しており、自ずと一部霊場巡りをするにもなる。

ミニ霊場には風光明媚な所が多かった。他方、当時の世相としては老人、婦女子がレジャーとして1日清遊するなどということはなかなか困難だった。しかし、ミニ霊場めぐりにより信仰と清遊が結びつき、私的な目的も半ば達成できるような社会環境が生み出されたことは、庶民生活に潤いと豊かさをもたらす意義あるものだったと言えよう。

8. 助実（すけざね）地区聖地

とと道は丘陵の斜面を登りきると、その上に開かれた畑の中を進んでゆく。振り返ると山陽自動車道の巨大な高架橋が眼下になっている。畑が終るあたりで左に曲がり、さらに右へ曲がると静かな住宅街となり、ほどなく助実公会堂前の広場に出る。

とと道はこの「聖地」から住宅街の中を下り、県道笠岡井原線（34号）に出る。県道を渡り、直進して大井小学校の前に出て左折（ここを右折すると大井公民館がありトイレを使わせていただける場合がある・要確認）、大戸口バス停に向う。



助実公会堂前広場



助実の観音様
建立 元禄14年（1701）

常夜灯
天保11年（1840）



聖地 助実地区

この広場には荒神様、御子神（みこがみ）様、十二神様、観音様そして常夜灯と様々な神仏が所狭しと祀られている。常夜灯には今でも毎晩灯明が灯され、観音様は毎年正月、驚くほどカラフルな彩色を施される。その上住民が集まる集会所も設置されており、お盆には250年も続く「水かえ踊り」と言う盆踊りが舞われる。

大井小学校区は盆踊りが盛んだが、ここがその発祥の地だという。そうした様子を見るにつけいかにも「聖地」といった雰囲気満ちていて、私たちは畏敬の念を込めてここを「助実の聖地」と呼ばせていただいた。

助実地区住宅街



9. 助実貝塚

助実地区から住宅街の中を下るとほどなく十字路になる。本来はまっすぐ下るがそこを右に曲がると住宅街の先に広場が現れ、大量の貝殻が無造作に散乱している。100年ほど前にはここで人骨も見つかったという。およそ4千年前の縄文時代後期の助実貝塚である。縄文時代には海がこの付近まで入り込み、ここが内陸になったのは江戸時代の吉浜干拓以降だという。笠岡市大島の津雲貝塚と同時代のものである。

助実貝塚



10. 大戸口バス停三方位道標

大戸口バス停に立つと自転車置き場の脇に明治39年（1906）12月と刻字された四角柱の道標が有る。

この道標は道路改修の際に移設されたということで、刻字からすると「ようすな」と「笠岡」の二俣の北側の道路脇に設置されていたものと思われる。

金浦からここまで方向を示す道標は無かったが、この道標に初めて「ようすな」の名前が現れる。出発点が初めて確認されたと言って良いだろう。とと道はここから県道を大戸上バス停へと向かう。



「ようすな」の地名がある道標

11. 大戸上バス停

大戸上バス停から集落を越えさらに左手に進むと山裾に小道が延びている。その小道に入り、三叉路を左折して山裾の小道を進み、さらに左折すると鉄塊(かなぐろ)山ノ神線に合流する。



大戸上バス停

12. 大持池付近のとと道

車道を400mほど進むと、右手に大持池が見える。とと道は池の堤防を渡り、東側を通過して再び鉄塊(かなぐろ)山ノ神線に合流する。(現在未整備)



大持池

13. 岩神池

北に向かうとほどなく広域農道377号線とぶつかり、とと道はそこを渡って北上する。右手に大きな岩神池が現れ、その西岸沿いに進む。

この池は旧新山村では最も古い谷池で寛永5年(1628)に時の領主により作られたとの記録が残されている。



岩神池

14. 岩神様

その後、岩神池の北の端手前で山側に左折して岩神様にいたる。岩神様は大きな花崗岩がそのままご神体として祀られており、磐座(いわくら)信仰の象徴を見ることができる。



岩神様

15. 上長迫のとと道

岩神様の北側(NTT ドコモ新賀西基地)の鉄塔の脇を通過して字「迫」のF氏宅へとつながる、かつて赤道(あかみち)ともよばれたとと道遺構を辿る。獣よけの網が張っており、通った後は元のように閉めていただきたい。



上長迫のとと道

16. 古道の存在を伝える空地

とと道遺構が広域農道に出るあたりにあるこの空き地にはかつてS家の住居があったが明治11年に解体された。建材は走出地区と新賀地区の境界の尾根道(走出薬師参拝道、現在の走出新賀線広域農道)を人力で現在の長福寺(1-23)まで運んだ。

その建材が庫裏(住職や家族の居間)になったという史実がある。このことから、この尾根道が明治中期以前にも、徒歩道として活用されていたことが分る。



古道の存在を伝える空地

17. とと道遺構入口

字「迫」（迫山）から坂を登った現在の走出新賀線は尾根道である。歩く時代の道は洪水等の被害を受けにくい山の稜線上を通っていた、ということを実感できる道である。

この道を東北方向に進むと右手に「とと道入口」の道標が現れ、森の中にとと道遺構が伸びている。



とと道遺構入口道標

18. ときわヴィレッジ

ほどなく森を抜けるとそこには「ときわヴィレッジ正門」と書かれた看板が有る。最近新しい建物が新築され、あたりの雰囲気は様変わりしている。この施設は、社会福祉法人「敬業会」が運営する就労継続支援事業所で、障がいを持つ人達がぶどう、桃などの果物、野菜、花、ハム、ソーセージなどの製造販売にあたっている（トイレあり）。



ときわヴィレッジ売店

19. ふるさとの森遊歩道

とと道は走出新賀線と別れ、かつての農道を東北に進む。田畑へ通う人がいなくなったので今では途中から山道と化している。突然現れる巨大な白い建物は、5万羽の鶏を擁するウインドウレス養鶏場である。

更に進むと、ここがかつてのメインストリートだったとはとても思われぬような深い森になる。往時をしのびながらクヌギやコナラの群生の中を1kmほど行くと、とと道は突然柵で遮られ、断崖の上で姿を消す。真下には広大な野球場が広がっている。

道は柵沿いに直角に右折し、その先の長く急な階段を下る。ここに存在した山は平成12年（2000）にごっそりと削りとられ「かさおか古代の丘スポーツ公園」に姿を変え、とと道は約600mにわたって消失した。



ふるさとの森遊歩道



復元されたとと道遺構

20. どんぐり球場西側のとと道遺構復元

協議会では消えたとと道を復活できないかと検討を重ね、野球場の西側に残っている山の斜面の雑木林の中を整備することに望みを託した。

その結果2022年春、笠岡市の計らいで左手の林の中の雑木を伐採し、踏み跡をつけ、とと道を復元することが認められた。従来の迂回路に比べれば俄然と道らしい雰囲気がある。しかし、急な下り坂なので注意して下っていただきたい。

下りきると「スポーツ公園」事務所前に出て、近代的な公園内を横切ってききな峠へと進む（トイレあり）。



復元遺構を下ると
バックネットの後ろに出る

21. 木々名古墳（跡地）

木々名古墳は「古代の丘スポーツ公園」の建設に先立つ平成9年(1997)の試掘によって発見された。

墳丘は開墾のため壊されていたが、円墳で直径約6.5m、周溝は幅1m内外、深さ20cm程度であった。須恵器、土師器、円筒埴輪の破片などが散乱しており、周溝内からは埴輪棺一基と鉄鏃一点が出土した。



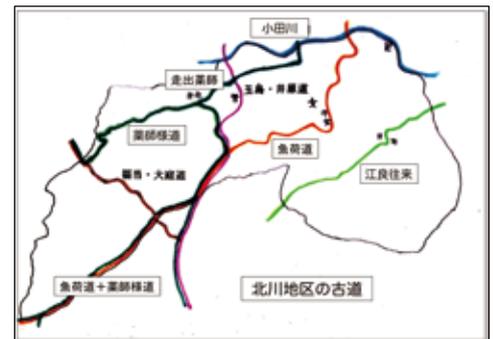
木々名古墳
(跡地)

22. ききな峠

この地には江戸時代には井原一玉嶋道が通り、幕府巡見使通行の記録(寛政元年 1789)も残るメインストリートだった。当地のK氏の祖父は(明治2年生まれ)明治30年頃まで魚荷を運んでおり、金浦から担いできた魚仲仕とここで交替して、約45キロの魚籠を天秤棒で担ぎ、3里(12km)の道を運んでいたと言う。

この峠は笠岡市走出地区の小字「木々名(ききな)」と山口地区の小字「聞名(きくな)」の境にある。このため「ききな」とひらがなで表記している。

ききな峠看板



魚荷道と薬師様道

23. 長福寺裏山古墳群

ききな峠にさしかかると長福寺裏山古墳群の看板が目をひく。

笠岡市走出・山口地域の境界をなす丘陵上に600mにわたって広がる古墳群である。古墳時代中期の5世紀に七つ塚古墳→双つ塚古墳→仙人塚古墳→東塚古墳の順に築造されたと考えられている。

仙人塚古墳から出土した短甲(たんこう・くろがねの鎧)は現在ニューヨークのメトロポリタン美術館で展示されている。

吉備中枢からやや離れたこの地域で、この時期、急速に台頭した勢力の存在が伺える古墳である。



薬師様道と走出薬師(持宝院)

この寺は平安の始めの開基で特に眼病にご利益があり、備中西部から備後にかけての参拝客が多かった。鐘楼の梵鐘は、銘文のある梵鐘としては県下最古のもので、県の重要文化財に指定されている。この鐘は戦国時代にあちこちを転々とし、その興味深い経緯が追銘として刻字されている。

薬師様道は金浦から走出まではとと道と同じ道であり、その参拝道をとと道として活用していた。月に3回の縁日には各方面から参拝客があった。年に一度の大祭には出店が沿道にたくさん出たり、見せ物興行も行われた。盆踊り大会も盛大に行われた。



持宝院



持宝院梵鐘縁起

- ・建長3年(1251) : 井原市野上の頂見寺再興時奉納。荏原の源の国重製作。
- ・天文20年(1551) : 庄氏、三村氏を攻め頂見寺にて合戦、梵鐘を猿掛城に持ち帰り、城の号鐘とする。
- ・永禄11年(1568) : 宇喜多氏猿掛城攻撃、梵鐘は小田川に転落。地元の農民が拾い上げる。
- ・永禄12年(1569) : 毛利氏猿掛城を奪還、庄氏復帰。走出城主 小田又六乗清が梵鐘を買い求め同地の延福寺に寄進。江戸初期同寺廃絶。
- ・寛文12年(1672) : 跡地に木の子村の薬王寺持宝院を移設現在に至る。

いくたびかの受難で64個の乳はすり切れ、今はわずかに12個しか無い。

24. カンカン地蔵

ききな峠からカンカン地蔵前に続く道路は江戸期からの主要道で、とと道としても活用されていた。「百万遍仏塔」と刻字された石碑を石で叩くとカンカンと乾いた音が響き、そこからこの名前がついたという。



カンカン地蔵

25. 山田の四つ堂

カンカン地蔵の先に、走出薬師様への参拝者等の休憩所だった山田の四つ堂がある。ここは北川の聖地と言ってもよく、牛供養碑、万人講石碑、お地蔵様、地神碑、北川昭和四国63番札所など様々な祈りの形が集まっている。とと道はその先で走出新賀線と別れ、井立川の土手道を辿る。



山田の四つ堂

26. 井立川の土手道

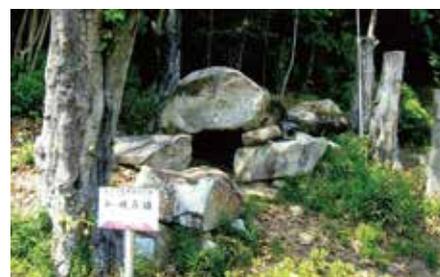
土手道は水田の中の井立川沿いを東へ向かう。平成28年に河川改修工事が終わり、実に立派な舗装の農道になった。そのためとと道跡という景観は残念ながら失われてしまった。



井立川の土手道

27. 山廻（やまもうり）古墳

山廻古墳は天神山の雑木林の中にある。封土は崩れて巨石が露出している。横穴式石室の長さは6.9m、幅1.8m、高さは土砂に埋もれて不明である。天井石は4個残っているが1個は割った跡が見られる。土師器片や須恵器が出土した。6世紀後半の築造とされている。とと道はこの古墳の前の道を東に進む。



山廻古墳

折敷山城址

古代の丘の北側の田園地帯にこんもりとした小さな山が2つ有る。南の天神山の麓をとと道が通り、北側の折敷山には山城が有った。天文年間（1532～1555）に有岡新之丞（摂州池田、有岡城の池田正充の弟）が建てたもので、出奔後小田氏領となり、小田政清（小田氏5代）が城主となった。

江戸時代になると走出村は幕府直轄地となったがほどなく一国一城制となり廃城となった。城址は下図の様に本丸、西の丸、北の丸からなり、門跡、堀切、切り通しなども見られる。



折敷山



28. 亀崎のとと道跡

集落の中の道を進むと北川四国68番所が三叉路になっており右に折れると再び井立川土手道に出る。大昔にはこのあたりまで海が迫っており、天神山の飛び出した所が岬だったので一帯を亀崎と呼んだという。

この道は舗装してはあるが道幅は昔のままで、車は通れない。井笠鉄道の軌道跡の広い県道48号線を渡り、ホームセンター「しんしん」(井笠店)前を通って興山(おこやま)の茶堂跡に向う。



亀崎のとと道跡(南から)

29. 法華一字一石塔と茶堂跡

ホームセンター「しんしん」横を少し行くと小山の中腹に「法華一字一石塔」が見える。寛政8年(1796)正月吉日に建立、縦約3m、横約2m、厚み約1mの碑である。この塔の下に般若心経の文字を書いた小石(基石の様な石)が埋められている。魚仲仕はこの碑の下の家でお茶の接待を受けたという。



亀崎のとと道跡(北から)

30. 甲弩(こうの)耕地整理記念事業碑

茶道跡を出て県道を少し進むと左手に立派な石碑が現れる。明治35年(1902)以来昭和3年(1928)年まで、30年ほどもかけてこの一帯約109haの耕地を整備した記念碑である。



茶堂跡



法華一石一字塔

31. 甲弩村庄屋 吉岡居宅跡碑

小田川堤防の手前に甲弩村元庄屋吉岡家居宅跡の碑が建っている。吉岡家は慶長年間に鳥取より当地に移住、平成23年まで17代続いた。5代から13代までは一帯の庄屋を務めた。



吉岡居宅跡に立つ顕彰碑

とと道遺構推定

甲弩地区では明治の終わり迄有った道は耕地整理事業(明治36~大正7年 109ha)により消失した。このため、江戸時代初期の吉岡庄屋文書の地図や辻橋の掲載された明治32年の地図からとと道遺構を推定した。

小田側も堀越宿の江戸期の家並図から現在の三海歯科医院と元よしや化粧品店の間の小路であることを特定した。



耕地整理記念事業碑



旧吉岡家郷倉

32. 辻橋跡

とと道は旧辻橋で小田川を渡り、対岸の小田へ向う。地元の人によれば辻橋は昭和17年（1942）頃まで使われていたという。昭和25年頃すぐ下流に木造の共栄橋が架けられた。現在の橋は平成8年（1996）に修復されたものである。

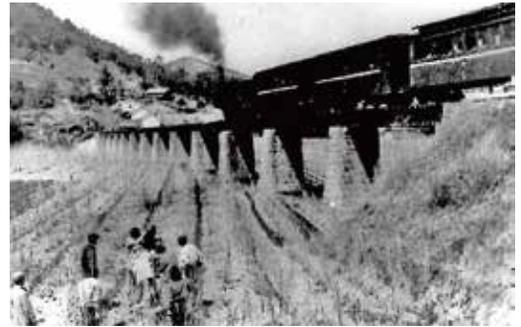


辻橋跡

33. 井笠鉄道矢掛線小田川鉄橋跡

矢掛線は大正10年（1921）、矢掛―北川間が開通。総延長5.8km、所要時間14分だった。46年後の昭和42年に廃止された。小田川の鉄橋工事が最大の難工事だった。

昭和28年（1953）にはこの鉄橋を舞台に、長谷川一夫、山本富士子の出演映画「花の講道館」のロケが行われている。撮影現場は桑畑の中だった。

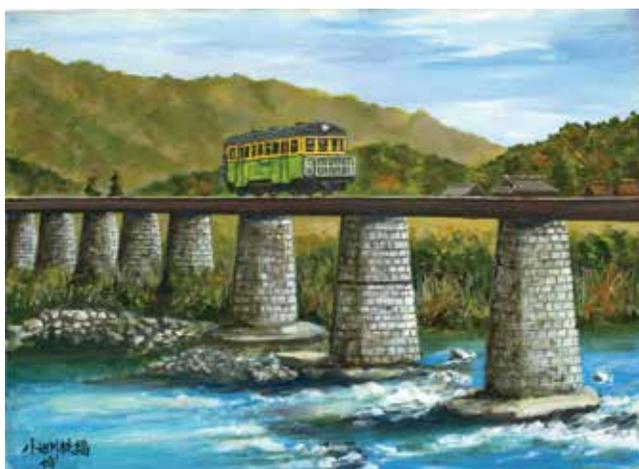


映画花の講道館ロケ風景

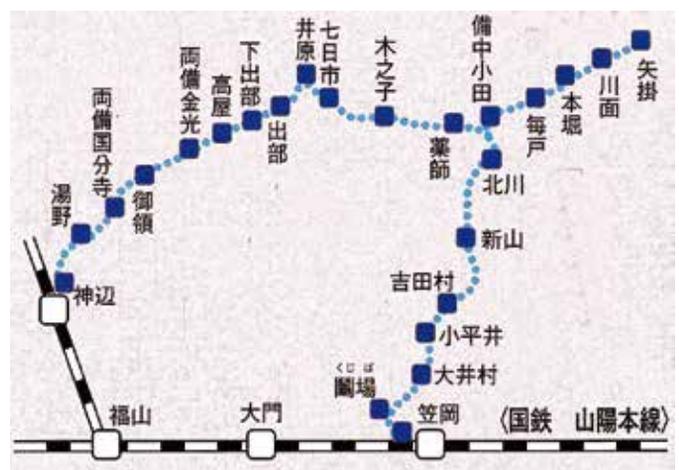
井笠鉄道

岡山県西南部の井原―笠岡間を大正2年から昭和46年まで60年間にわたって走っていた軽便鉄道。大正10年には北川―矢掛間、14年には井原―高屋間、さらに昭和15年には高屋―神辺間を加え総延長37kmと県下最長の私鉄となり、朝夕の通勤通学時間帯には5-6両編成の列車が運行されるなど地域の足として大活躍をした。初代社長は日本のビール王として高名な井原出身の馬越恭平氏である。

しかし、昭和40年代になると自家用車が普及、昭和42年に矢掛支線、46年には本線が廃止されその使命を終えた。現在小田市街でその軌道の跡が見られる。その20年後、昭和61年末、沿線市町村により第3セクター井原鉄道（株）が誕生、井笠鉄道の支線部分を拡大して引継ぐ形で平成11年に総社―神辺間41.7kmの運行を開始、今に至る。



小田川鉄橋（三笠博通画）



井笠鉄道路線図

②里山コース（小田川→美星・三山）

ガイド 番号	主要ポイント	全行程ウォークプラン			部分ウォーク+ 車伴走プラン	
		km	所要時分	備考	移動手段	所要時分
2-1	小田辻橋跡	3	60		ウォーク	30
2-2	江戸期の道標					
2-3	江戸期の石垣					
2-9	日置谷公会堂				車乗車	15
2-10	宇内ホテル公園	1	40	トイレ有り	ウォーク	40
2-14	川面四国40番 霊場参拝道入口	2	60		車乗車	15
2-17	まぼろしの県道 登り口					
2-19	毛野の二股道標	1	40		ウォーク	90
2-20	百万遍念仏塔					
2-22	四方位道標	1.5	40		車乗車	15
2-26	布東公会堂					
2-28	三山八幡神社	1.5	30		乗用車	15
				合 計	ウォーク	180
					車乗車	60
	合 計	10	4:30			4:00



1. 小田市街とと道遺構

小田市街のルートは土手沿いの三海歯科医院と旧よしや化粧品店の間の細い小路から始る。小路を抜けて通りに出て右に曲がり、さらに左側にある最初の小路に入って行く。小田の東町の江戸期の道標まではこうした迷路の様なルートがくねくねと続く。別冊の拡大詳細図を参照しながら歩いていただきたい。

2. 小田東町江戸期の道標と郡宮址石碑

小田市街の迷路の様な小路を北へ抜け出すと正面に水田が広がる。そのきわの田んぼに埋もれる様に道標がポツンと顔を出している。「みぎハ まつやま道 なりハ 延享2年(1745)」と刻字され、この道の遙か先に成羽があることが初めて確認でき、さあ吹屋へ!との思いが湧く。

道路改修のため少し移動しているとのことだが、元はどこに有ったのか?道標に従い、右=東へ向い、左手に現れる小さな水路沿いの細道に入る。水路対岸に見える石垣は江戸時代のままと言われている。その先で県道に合流し、そのまま北上すると左手の空き地に「郡宮跡」と刻字された小さな石碑がある。(小田駅トイレあり)

3. 中小田の魚荷中継所跡

郡宮址石碑の先を左に曲がり中小田の公会堂を目指す。突き当たって右へ向い、50mほど先、道が右にカーブしている場所の白線と花壇のあたりが小田の魚荷引継所だったという。

G氏(安政元年生まれ)の家の前は道幅が広がったということで、今でもその名残りがあ(下の○印部分)。また、近所のK氏(大正9年生まれ)は父親から明治の終わり頃、このあたりで魚仲仕(うおなかせ)のかけ声を聞いたことがあると聞かされている。



小田側から鉄橋を渡る井笠線(三笠博通画)



三海歯科横と高架道路下のとと道遺構



江戸期の細い水路と石垣

小田郡郡衙(ぐんが)の影

5~6世紀にこの一帯を統治していた吉備国は7世紀末にヤマト朝廷の統治下で備前、備中、備後の3国に分割された。

その後大宝元年(701)から施行された大宝律令によって日本の行政組織は国、郡、郷の3段階に編成され、この一帯は小田郡とよばれた。奈良時代の小田郡には8つの郷が有り、現在の美星から笠岡をカバーする領域だった。

郡名を負った小田郷(現在の小田地区)には郡脇、郡上、郡前と言った字(あざ)名があった。このためこの一帯はかつて小田郡の政治の中心地(郡衙)であったと想定される。ただし、現在までに郡衙の遺跡的なものは発見されていない。このため郡宮の祠があった地点に郡宮址の石碑が建てられている。

郡宮そのものは大正4年(1915)に武苔神社に合祀され現在に至っている。その後、明治維新の折にはこの地域は一時的に小田県と命名される。

ここを歩くと、この一帯の古い歴史が偲ばれる。



郡宮址石碑と武苔神社にある郡宮祠



往時の魚荷仲継所跡

4. 歌僧正徹誕生之地

仲継所跡から東へ進むとほどなく神戸山への登山道と交叉する三叉路になる。このあたりは南北朝末期の応安2年(1369)に地頭として着任した小田氏や配下の屋敷地跡が広がっている。初代秀清の孫、正徹は後に京都に出て中世を代表する歌人となるが、その生家跡が三叉路を左に5mほど登った所にある。そこで左に曲がり山裾を横断する小道に入る。ゆるやかな斜面を横切って北へと伸びる小道は小田の眺めが良く、正に正徹の道と呼びたい心地良さである。



5. 岩見堂と牛供養碑

途中、石垣の有る十字路が現れるが、これを下ると県道野上矢掛線(407号)に出る。その道角に四つ堂(岩見堂)と牛供養碑が並んでいる。牛供養碑には「右 矢掛、左 三山 高梁 明治35年」と刻字されており、小田市街の外れで見た「なりハ」に加え「三山、高梁」というと道の目指す地名が更に確認されることになる。



岩見堂の棟札には文化12年(1815)再建の墨書があり、古くから往来の多かった松山道であったことが分る。なお、ここから再び登り返して山裾の道に戻ると、北へ向ってさらに200mほどと道遺構を楽しめる。



岩見堂横牛供養塔

七	右	明治
左	牛	三十五
三	山	年
高	梁	

6. 林田(はいだ)川沿いのとと道遺構

山裾の道は神戸山の北東方面で終り、県道へ下る。出口には矢掛の神楽舞いの社のひとつ矢掛社の事務所がある。県道の反対側に真新しい分譲住宅地が開発され、その脇に細い道が作られている。



山裾の道北端からの下り

従来足を踏み入れられなかったとと道遺構であり、ここを通過して林田川を渡り、北の亀山方向へと向う。新しい開発でとと道が消える場合もあれば、こうして開発のおかげでかつてのとと道が現れる場合もある。これに気付くにはとと道を守ろうとする地元の人がある存在に日頃から関心を持っていることが肝心だ。



林田川沿いのとと道遺構

7. 亀石

車道に出て右に進むと道はほどなく三叉路になり右に曲がる。かつては「右 神代(井原市)、左 笠岡」と刻字された道標があったが道路改修工事で今は小田寺境内に移設されている。

左手にかつての大庄屋・真安家の屋敷があったという空き地が続く。ほどなく左手道路脇に亀の甲羅を形どった石像が現れる。賽の神(さあのかみ)と呼ばれ、よそから悪霊や害虫が村に進入するのを防ぐ神である。



亀石



地藏堂

8. 地藏堂

亀石の先で左手から小路が入って来る。その小路の左側奥に四つ堂が見える。元文2年(1737)、弘化3年(1846)の棟札がある。道路改修のために道脇から小路の後方へ移設されたものである。

9. 日置谷とと道遺構一部変身

小田の平野部分はそろそろ終わり、このあたりから山への傾斜が始る。日置谷公会堂の前に地蔵尊があり「右まつやま左なり口（破損）」と刻字されている。

方向からすると正反対を示しているが、この道標は本来、公会堂のやや南に有るとと道遺構の脇に、南向きに建てられていたと思われる。道路工事の為に公会堂の前に移された折に反対を指すことになってしまった。

そのとと道遺構は住宅の前の畦道から始まり、田んぼの脇をくねくねと曲がりながら切れ切れに続き、羽賀池へと向かう。

秋にはその道の両脇に彼岸花が見事に咲きそろう。しかし、2021年に水田の中のあぜ道がまっすぐな舗装道路となり、東へカーブする迄の部分は舗装におおわれ、姿を変えてしまった。カーブしたあとの部分は幸いにしてとと道遺構のおもかげを残している。



とと道遺構



日置谷公会堂前地蔵尊

10. 羽賀峠とと道分岐点

舗装道路と畑道のミックスしたあぜ道を辿り羽賀池に出る。やや高みになり、背後には小田から甲斐にかけての広い眺めが見える。ここから旧小田村と旧宇内村の境にある羽賀峠への登りとなる。

峠では左右に細い道が別れているが、とと道は右手に下る半間ほどの畑道である。宇内の古老によれば戦後占領軍のジープがこの細道を下ってきたのを見たとのことだ。下りきるとホテルで有名な星田川のほとりに出る。

往時、川に橋は無く、川の中に石を並べた「とびそ」と呼ばれる石伝いに対岸に渡っていた。川沿いにはホテル養殖のための建物とトイレを供えたホテル公園が有り、毎年6月にはホテルの飛翔を観察できる。**(トイレあり)**

この先は田んぼの中を進み、左手に小森（こそもり）神社（宇内神社の神輿のお旅所）を見て、当時の宇内の言わば中央道にぶつかり、左折する。



新しい舗装道路↑

とと道遺構の一部が舗装道路になった。



この部分はかつてのままに残った。

宇内のホテル養殖

かつて昭和40年代までは矢掛町のあちこちで川の上がホテルの光で明るくなるほどホテルが飛んでいた。しかし、農薬散布の影響で昭和50年ごろには最盛期の1割ほどに激減、宇内の自治会では「ホテルを守り育てる会」を結成、ホテルの養殖を進め、平成20年頃までには6割程に復活した。

毎年5月下旬から6月上旬にかけて「宇内ホテル観賞旬間」が設けられ、土曜、日曜にはホテル祭も開催される。ホテルがよく飛ぶのは曇った、月の無い、気温の高い日。宇内のゲンジボタルは2秒ごとに光り、飛びながら光るのがオス。演舞時間は夜の8時頃から9時過ぎ頃まで。

なおホテルに出会える時期は6月以外にも10月の養殖ホテルの放流時、そして3月末のホテルが蛹になるために川から陸へと上がる時の2回ある。神秘的な生態の観察ができるチャンスである。



羽賀峠とと道分岐点



宇内のホテル養殖場

とびそ

とと道沿いには多くの流れが有り、それを無事に渡るのが難問だった。橋を架けるのは大事業だし、架けても洪水になると流れてしまった。

結果多くの流れでは川の中にいくつも大石を並べ、それを飛び飛びに渡るという方法が効率的だった。宇戸谷に下る美山川の溪谷には合計13ヶ所ほどものとびそ渡りの場所があった。



ホタル公園横を流れる星田川に残るとびそ

11. 宇内の大師堂跡

西に向かうとほどなく十字路に出る。その北の角にかつては四つ堂が有り、明治4年から昭和35年頃までは大師巡礼者をはじめ地元の人々にお茶（ほうじ茶）の接待をしていたという。

四つ堂には川面四国霊場（安政3年・1856に神島四国霊場を勧請して創設したもの）第35番霊場が祀られていた。

その後道路改修のため同地の西明院に移設されている。



宇内西明院に移設された大師

12. 若宮様

とと道は十字路を右折し北へ登って行く。これから角坂（つのさか）の急坂が始る。ほどなく右手に若宮神社の鳥居が見える。鳥居の右前には五角柱の地神碑が祀られ、一角には「湧出地神」の刻字が見える。

そもそもは四つ堂前に建立されていたが、道路改修のためここに移されたものである。これにより四つ堂では良い水が湧いていたことが分かる。矢掛で疫病が流行った折りに、この水を飲んでいて宇内の人は罹患しなかったと言われている。



宇内若宮様と四つ堂址（○印）

13. 今石の四つ堂

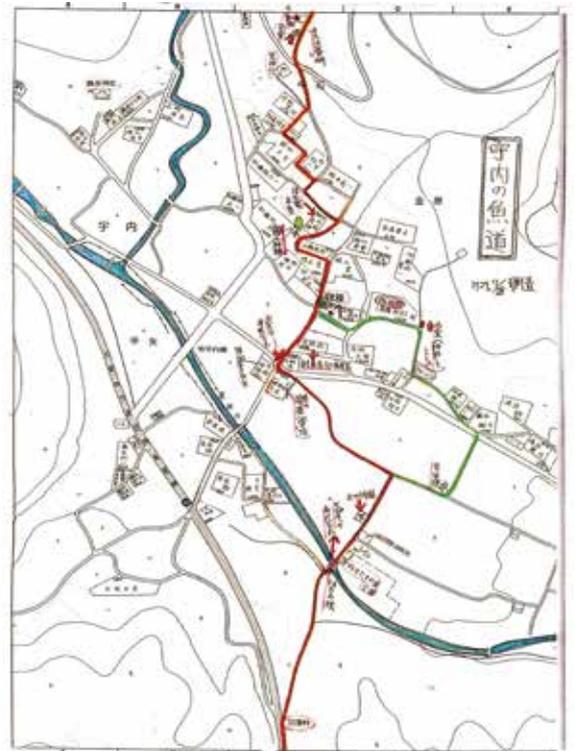
村の中の道はなかなか複雑で、とと道のコースは右に左に曲折する。右の詳細ルート図を参照いただきたい。

途中荒神社の脇を通るが、平成17年9月の台風でご神木が倒れ、根元だけが遺されている。

村の最上部に四つ堂があり、39番霊場が祀られている。魚仲仕はここで休憩したと伝えられている。



今石の四つ堂



14. 川面四国 40番霊場参拝道入口

今石の四つ堂を出ると山道となり、ほどなく県道の一画に出る。それを渡って県道を左にやや下ると右手の山の斜面を斜めに登る草刈り道が現れる。以後、とにかく直上するとと道と、つづら折りを繰り返す車道が幾度か交叉することになる。昔と今の道路の作り方の違いがよく分かる区間である。草刈り道を登ると正面に40番霊場が安置された三叉路が現れる。そこでとと道は本来左に向うが、今ではその先に5mほどの高さの車道の擁壁が立ちほだかり、登れないため、右側に向い車道に出る。

15. 41. 42番霊場

しばらく車道を登る。道路工事に伴い移設された41、42番霊場が県道の右側の藪の中に見られる。冬には草刈のおかげで姿を現す。

16. とと道沿いの43番霊場

車道をさらに進むと、藪で覆われた正面の斜面の中央に、シーズンにはそこだけ藪が刈り払われた道が現れる。これこそ正にかつてのとと道である。最初の登りは急だが、それを登りきると森の中のゆるやかな登りになり、ほどなく右手の山の斜面の上に第43番霊場が現れる。道なりに登って角坂池の上を辿って再び県道に合流する。

17. まぼろしの県道登り口

宇内一帯では「まぼろしの県道」という言葉を良く聞く。昭和の初め、宇内から美星に至る道として旧道が県道へ昇格することが決まった。ところが戦争のため工事は沙汰止みとなり、戦後になると、この道では車が通れないことから県道は別のルートに変更された。このためこの道はまぼろしのままに終わり、まぼろしの県道と呼ばれる様になったという。

では実際にはこの旧道はどこを通過していたかとなるとまぼろしただけに諸説紛々、特定はなかなかできなかった。これからいよいよ55年ぶりにその道へ足を踏み入れることになる。県道をやや下り左にまがり、バックする感じで登って行くと白いガードレールの付いたコンクリート舗装の登り口が現れる。「登り口」と書かれた白い道標が有る。登り始めてすぐ左に44番霊場が現われる。



40番霊場参拝道



40番霊場



41番霊場



42番霊場



43番霊場



43番霊場参拝道



対岸から見た
角坂出口



まぼろしの県道入り口

新しい道標

とと道ルートを探索・整備したもののそれだけでは一般に公開しても歩いていただくのは困難。かつての石の道標に変わる新しい道標が必要ということで風雨にさらされても長くもつ素材（アルミ板にUVカットの塩ビマットを貼付けたもの）を求め、3年に渡ってほぼ80ヶ所に道標を設置した。

地権者の許可が必要な地点も多々有りまだルート全体を充分にカバーしてはいない。残念ながら抜かれてしまうケースもあり今後の管理が必要。今更ながら数百年を生き抜いてきた古い石の道標達の堅固さ、信頼感に圧倒される。



現代の新しい道標

18. まぼろしの県道と小盛山山頂霊場

とと道里山コース南部ルートハイライトはこのまぼろしの県道部分。山中に入って行くと左に手づくりの階段が現れ、そこからが55年ぶりに再開された山道となる。しかし、その前に階段とは反対側にある小盛山の山頂に寄り道をしたい。

そこには何と①川面四国45番霊場、②神島1番、88番霊場、③水砂33観音の12番霊場と4つもの霊場が並んで祀られている。道路工事のために移設されてこうなった何とも有り難い場所である。

今後の無事を祈って参拝を済ませたら手づくり階段を登り、森の底に深くえぐれた様に続く山道を辿る。誰も通らなくなって両側の土が崩れて狭くなっているのかもしれない。

上部の方は道がやや不明瞭だが森の中の尾根道を上へ上へと進めば良い。10分ほどで下部の登りが終わり、古い林道が山腹を水平に西へ向っている。とと道は正面の笹藪が刈り払われた直登道である。

一休みして、苦勞の末に開通された直登道を登る。探索に時間がかかっただけにコースタイムは当初1時間と想定したが、実際にはわずか30分ほど。笹の切り株に気をつけさえすれば楽に歩けるコースになった。山中の藪の中に一間巾のまぼろしの県道が見事に浮かび上がっている。

19. 毛野の二股道標 (標高300m)

刈り払われた森の中の道を登りきると吉備高原特有の高原状の場所に出る。右にも左にも開墾畑が広がる。そこを北へ向かうと二股になる。下ではなく、上の方のやや細い草付き道を辿る。笹藪が刈り払われた先に四角い道標が見える。これがまぼろしの県道の位置を特定するきっかけとなった毛野の二股道標だ。

道標の西北の面には「大正15年6月」、そして東北の面には「右 小田矢掛 為亡牛 左 舊道」と刻字されている。道標の位置に立って南を見れば、上下に道があり、そこは正に二股。右下に進めばやや広い、車の通れる舗装道路につながる。左上は今登ってきた山中へとつながる藪に囲まれた道。

道標の刻字はそれを舊(旧)道と明示している。つまり左の道こそがまぼろしの県道であり、とと道なのだ。二股道標から北に進み、左方向へゆるやかにカーブして車道に合流すると左手の畑の中に「右 成羽 左 毛野」と刻字された牛供養碑がある。



44番霊場



小盛山山頂霊場



手づくり階段

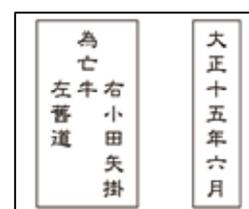
まぼろしの
県道出口



毛野の二股道標



二股から
100m北道標



二股道標の刻字 毛野集落への道



20. 毛野の百万遍念仏塔

牛供養碑を見て毛野の集落へ向かう。店峠（みせんたわ）へと登って行くと右手に百万遍念仏塔が現れる。毛野の大仙院址の参道に建立されていたが、山崩れにより現在地へ移設された。右の石碑が享保19年（1734）、左が文政10年（1827）である。大仙院は昭和31年に井原市の北山町に遷座された。

この先200m地点で「右 内道（地区内の道）、左小田」と刻字された道標が見つまっている。

21. 四方位道標

百万遍念仏塔からは店峠の十字路を北へ向かい、高原状の起伏の中を進む。道は複雑で、最初の二股では下らずに上の道を、次の二股では下の道を、その次の三股では中央を、といった具合で大変分かりにくく協議会設置の道標に従い慎重に進みたい。

徳山牧場の施設を右に見て道なりに進み、しばらく行くと少し登りかけた所を標識に従って右に登る。その先に三叉路があり、中央のロータリー状の所に四方位道標が姿を現す。紡錘形のまろやかな石の3面に「東うと、西いはら、南かさをか、北なりハ」とたおやかなひらがなが刻字され、それぞれの道の行き先を示している。複雑な地形で位置が分かりにくい吉備の山中で、旅人はこの優しい姿の道標を見て深い安堵を覚えたことだろう。

22. 布東の大師堂

四方位道標の北側右に大師堂がある。地元では「布東のおでいっさま」と呼ばれている。棟札には地蔵堂改修という墨書が見えるがその年代は無い。平成20年頃までは縁日にはここでお接待もあり参拝者も多かったというが、今ではそうした機会はなくなってしまった。

23. 布東の牛供養碑

大師堂を背に北へ下る。道の遥か先に小山が盛り上がっていて、その山腹にわずかな集落が見える。一体どんな集落か？と思いつつ進んでいると左手下からやや広い道が合流してくる。

その合流点に小さな万人講の道標がある。「右ハ 井原 左ハ 小田ヲ経テ笠岡 大正15年11月」と刻字されている。

24. 布東の仲仕（なかせ）仲継所跡

正面の小山が近づく。その中腹に集落があるが、右端の家と左の家の間がぽっかりと空いている（赤丸）。実はかつてはそこに美星の仲継所のひとつがあった（黄丸）という。重い荷を下ろし次の仲仕につなぐ休息の場だ。



毛野の集落



百万遍念仏塔



百万遍北
200m道標



徳山牧場の脇のとと道遺構を行く



四方位道標



大師堂



布東の
牛供養碑



25. 布東の道標

牛供養碑の先で道は上下2段になって続いている。上の段は本来の道、下の段は田に入りやすい様に耕作道として新設された道である。2つの道が合流した先のカーブの北側に紡錘形の道標がある。「右 三山 成羽 吹谷 左 小田 笠岡 神嶋」と、この山からは遥かに遠い、広い世界を俯瞰した目的地が刻字されている。「谷」の字を使った「吹谷」の名が刻字されている道標はこれだけである。



布東の道標



布東公会堂前

26. 布東公会堂庭の道標

布東公会堂の左手には元禄10年（1697）の道標が置かれている。「右 まつやま道 左 なりわ道」と刻字されている。道路工事により移設されているが、設置されたのは320年以上も前であり、古くから人々がこの地を往来していたことが分る。



布東公会堂の道標



御題目碑

27. 御題目碑

布東から北へ向い県道48号線に出て二の峠（にのたわ）の交差点を直進して下る。途中県道を右に外れ、覚林寺の裏を抜けると三叉路になる。そのすぐ右側には宝暦2年（1752）の御題目碑がある。覚林寺の南には鎌倉時代の「地頭方分」があり、中心には土塁＝土居の前遺跡が残っている。

中世の三村氏の豪族屋敷であったと推測されている。三叉路を左折し再び県道に合流、坂を下れば三山八幡神社に至る。



左右	左右	
大正五年	矢掛小田	井原
		明 治 六 年
		おのミち
		かさおか
		おのミち

28. 三山八幡神社広場の牛供養碑

（金浦から24km 標高 328m）

広場の北側の道路脇に牛供養碑が2基並んでいる。左手の碑には「右 井原 左 矢掛小田 大正5年」、もう一方には「右 おのミち 左 かさおか 明治6年」と刻字されている。笠岡金浦から24km、まだとと道全行程の半分ではあるものの、道標や様々な情報から吹屋への道は絞られ、魚荷を担いだかつての魚仲仕同様、さあ行くぞ！とこれからの道程に気持が高まる地点でもある。



三山八幡神社

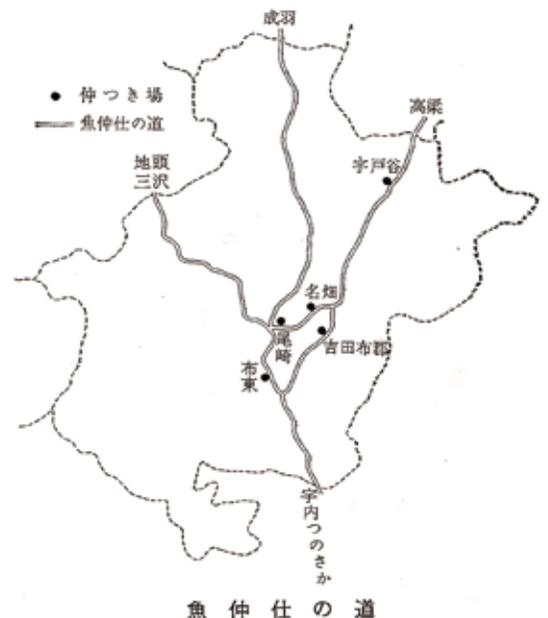
美星の仲仕（なかせ）仲継ぎ場と仲仕問屋

美星は鮮魚の生産地と消費地の中間に位置していた。三山の名畑、尾崎（おさき）、吉田布郡（よしだふこうり）、大倉の布東、宇戸谷など5つほどの地点には仲仕の仲継ぎの場があり、三山には笠岡や下津井にある鍵親（生産地のまとめ役）と吹屋にある問屋との間の世話をとりもつ仲仕問屋もあった。

最盛期には20～30人の仲仕が出入りし、寝ていて荷の来るのを待つ者、早く起きて荷を取りに行く者などが、くじ引きで仕事を分けていたともいう。

仲仕達は夜明けの4時頃三山へ着き、朝の9時に吹屋、さらに夕方6時には新見に到着していた。成羽までの担ぎ賃は一人26銭と3合の米代だったという。

魚仲仕はどこがようてほれた 尻の振りよろしく
足軽さよヨーホー ヨイヨー



美星のとと道（美星町史より）

③吉備高原コース（美星・三山→成羽）

ガイド 番号	主要ポイント	全行程ウォークプラン			部分ウォーク+ 車伴走プラン	
		km	所要時分	備考	移動手段	所要時分
3-1	美星三山八幡神社	2	50		ウォーク	30
3-3	三山金定古墳					
3-4	山之谷の牛供養碑					
3-5	あずきもち入口				車乗車	15
3-7	洗 場	3	50		ウォーク	30
3-8	梨の木峠下三叉路					
3-9	長谷のみちしるべ	3	50	トイレ有り	車乗車 途中見学 下車	60
3-12	西林国橋先生 顕彰碑					
3-14	神楽公園	2	20			
3-15	下日名歩き	2	30		ウォーク	30
3-15	下日名の大師堂				車乗車	15
3-17	成羽新町歩き	2	40		ウォーク	30
3-21	本丁神楽ロード					
3-23	成羽美術館			トイレ有り		
				合 計	ウォーク	120
					車乗車	90
	合 計	14	4:00			3:30



1. 旧三山商店街西端

三山八幡神社の十字路をまっすぐ北へ向うと、住宅街を抜けた所に小さな十字路がある。傍らの石垣、土塀は江戸末期、菜種油の商いなどで財をなした大庄屋三宅氏の屋敷跡。右手に見える道路沿いは昭和40年代ごろまで繁栄していた旧三山商店街である。



旧三山商店街西端の十字路

2. 石垣の上のとと道遺構

この十字路を北へ登り、次の道標で市営住宅の前を右に折れ、石垣の上のとと道遺構を曲折しながら辿る。ほどなく旧新星被服工場の前を通り、市道に出る。脇には竜王山中山宗金線の標識が見える。この近くには江戸時代初期、備中猿掛領の初代領主であった花房志摩守正成が開基壇越である日蓮宗の獅子吼山法音寺がある。



曲折して続くとと道遺構

3. 三山金定（かねさだ）古墳

ゆるやかな斜面を蛇行しながら高みへ向うと遥かに、瀬戸内海、阿部山系の山々が見える。道沿いには古墳時代後期に造られた横穴式石室の金定古墳がある。台付壺、器台等の須恵器が発見されている。この一帯にはこれ以外に塚原、宮迫、又岡などの古墳も見られる。



三山金定

4. 痰咳様～山之谷の牛供養碑～大日如来の牛供養碑

道はほどなく右方向へカーブするがそこに一間四方の祠があり、痰咳神と刻字された大きな石碑がある。昔、地元のある女人が越出の痰咳神のご利益を受け建立したという。

コロナ禍に悩まされる現代人にとっては思わずコロナ退散を祈りたくなる場だ。実際、今でも参拝客が見られる。その先の山之谷には昭和十年に設置された小さな牛供養碑がある。「南ヤカゲ、北クロハギ、ジトウ」と刻字されている。

林の中をゆるやかに登ってゆくと平坦な道になり、700mほど先の右手の草むらに大日如来の牛供養碑がある。「右 小田、左 やかげ」と刻字されている。



金定古墳

5. あずきもち入口の道標（標高400m）

あたりが開けた所で東からの市道と合流、下り気味になると林道の入口が現れる。入口の道標には「右ハなりわ道、左ハきの山え」と刻字されている。一帯は昔から「山の神様」の場として伝えられており、人々の交通安全や健康を祈願してきた。

ここから旧小田郡・川上郡の境に約700mにわたって林道が続き、「あずきもち」と呼ばれている。



痰咳神祠



あずきもち入口



あずきもち入口の道標



大日如来牛供養碑



山之谷の牛供養碑

6. あずきもち出口と神田峠

雑木におおわれた林道を下ってゆくと突然森が途切れ、県道48号線の神田峠（じんでんだわ／越出峠）に出る。昔、地元の黒萩八幡神社には峠に1反ほどの神田があり、収穫が祭りの費用に充てられていた。それで神田峠と呼ばれるようになったという。左に向かい市道洗場線との三叉路のすぐ手前で右側の住宅の横の里道に入る。大師堂が現れ、そこを左折すると再び市道に合流する。右折して程なく洗場の牛供養碑が現れる。



あずきもち中程の枯れ葉道



あずきもち出口から見る洗場口方面



とと道遺構は住宅の北側を辿る。
中央奥が大師堂

7. 洗場の牛供養碑

牛供養碑には「大正七年三月十五日、右宇戸谷、左中杉」と刻字されている。市道を外れ里道を登り、竹やぶを越え、住宅の間を抜けて登って行くと再び市道に合流する（標高385m）。その先の峠の十字路を北東へと下ると県道35号線に出る。全60kmのとと道コースの中で舗装道路がひたすら続くのはこの峠から成羽市街迄のコースで10kmほどもあり、伴走車に乗りたくなるところである。

8. 梨の木峠下 三叉路

県道35号線の突き当たりから約3kmほど下ると保木上橋に至る。途中日名川の対岸にととみち遺構が4箇所程あるが一部森に埋もれて歩けない。



洗場の牛供養碑



遺構は先の竹やぶの中へ

9. 長谷（ながたに）の道しるべ

三叉路から35号線を2kmほど下り、谷が開けてきた所で左から48号線が合流する。狭い谷間は次の様な様々な道標で賑やかで、古来往来の多い場所だったことが分る。

- ・合流点の100mほど手前の水名入口に「右 やかげ 左 なかすぎ・道」と刻字された小さな道標。
- ・朝日橋の近くには「左やかげ、右三山道、下なりわ」と刻字された道標。
- ・合流点には四字（あざ）四国88霊場の29番札所＝影安のお堂と「左ヘンロミチ」と刻字された指の形の道標。
- ・お堂の下流には天保3年（1832）6月と刻字された石灯籠。



住宅街の横を登るとと道遺構



天保の石灯籠



影安のお堂・指の形の道標



朝日橋道標



水名入口道標



梨の木峠下三叉路

霊場四字四国

影安のお堂は29番、中杉の方へ少し登った滝の奥は31番、願成寺下の椿堂は32番、願成寺は33番となっている。これは水名、日名、渡雁（わたかり）、中杉の成羽町を含むこの一帯の4つの字（あざ）にわたって設けられた「八十八ヶ所霊場」の札所の一部の番号である。この札所を四字四国と呼ぶ。

10. 谷沿いに続く信仰の地

日名川対岸の山の斜面には狐の化身を祀るといふ玉守神社（南）や寺荒神（北）の小さな祠が並んでいる。下流には寛文年間（1661-1672）創建の願成寺が見える。境内の巨大なお大師さまの立像が目を引き。さらに下流の山中には建武2年（1335）創建の中山神社がある。深い谷沿いの信仰の地である。



願成寺

11. 保木上橋（標高200m）と植物化石

新旧2本の橋が並んだ保木上橋を渡った先が美星町と成羽町の境である。この橋の手前を東に向かう坂を登ると植物化石で有名な日名畑がある。

成羽の化石は、今から約2億年前の中生代三畳紀のもので、陸のシダやソテツなどの植物、海のモノチスという2枚貝などが化石となったものである。長い間に5層の地層が折り重なり、日名畑層はその一番上の層ということで世界でも珍しいほど多くの種類の植物化石が発掘されている。成羽美術館ではそのおびただしい現物が見られる。

谷間を隔てた美星町側の水名でも植物化石を産出していた。橋から200mほど下ると右手に35号線の道路改修記念碑が見える。



保木上橋（新旧2本の橋がある）



日名畑層化石
ハウスマニア・ナリワエンシス（シダ類）

12. 西林國橋顕彰碑

成羽町に入り少し下ると本村という地区に入る。古い木の案内板が立っている坂道を登ると神代神楽の創始者西林國橋の顕彰碑がある（墓ではない）。さらに進むと飛の甲（とびのこう）、荒神社、大師堂、五角柱の地神碑、多くの白色五輪塔があり、古道が通っていたことが伺える。



顕彰碑周辺の眺め



西林国橋先生「墓」



隈前神社

13. 王子橋と隈前神社

とと道遺構は美星町・成羽町の町境から35号線を約1.5km下った地点で県道を外れて左折、西へ下る。「王子橋」を渡り、隈前神社の前を通過して北へ向い、日名川左岸の集落に出る。

一帯の岩盤が固く、当時の技術では、現在のように直進する道は造れなかったためだという。隈前神社観音堂には菊の紋章入りの瓦があるがその由来は分らない。西側には熊ノ谷という谷があり熊野神社に縁の深い土地なのかもしれない。



王子橋

14. 神楽公園

かつての成羽町立日名小学校は平成11年に閉校され、今では神楽講習などをする「日名交流館かぐら」となっている。道の反対側には神楽公園が整備され、「西林国橋先生顕彰碑」、「備中神代神楽碑」などが建立されている。

トイレもあり、駐車もできる広場である。交流館からかなり長い階段を登った所にある御前（おんざき）神社の本殿は雪が深いせいなのか珍しい鞘堂におおわれている。国橋はこの宮司をしていたという。（トイレあり）



西林国橋先生顕彰碑



御前神社前の地神碑



御前神社鞘堂

西林国橋略伝（1764-1828）

明和元年（1764）、現在の高梁市落合町福地（しろち）で神官を務める家に生まれ、神道や国学を学び京都に遊学。さらに学問を高め、文化元年（1804）に帰郷。母の生家であった日名村（現在高梁市成羽町下日名）で神官を務めるとともに、近在の子供たちに国学を教えていた。

その間、かねてから荒神神楽がややもすれば低俗な内容だったことに不満を感じていた国橋は、国学の素養を發揮して「古事記」や「日本書紀」に題材を求めた演劇風の創作に取り組んだ。そうして誕生したのが『岩戸開き』、『国譲り』、『大蛇退治』の三編で構成した「神代神楽（じんだいかぐら）」だった。まず下日名の御前神社に教え子たちの実演で奉納し、合わせて周辺の神社への普及に努めた。

彼の死後、その偉業を讃える門人たちの手によって「西林国橋」の碑が建立された。また、昭和28年には、国橋の顕彰碑とするため「備中神代神楽顕彰碑」が建立され、現在は神楽公園に移設されている。



日名川を対岸に渡る



15. 下日名のとと道遺構歩き

神楽公園から1.3kmほど北にある荒神社のところで橋を渡り、日名川対岸の下組の集落に入る。かつてここではとびそを伝って川を渡っていたとのことだ。

左側の坂を少し登って蔵元荒神社に寄り道する。社の右側には実を羽子板の羽根に使う背の高いムクロジュの木が生えている。秋には黒い実が落ちている。

元に戻り集落へ入り、民家の間の細い踏み跡程度の道を進む。民家の表札には元庄屋の黒川の名が多い。祠、地神、お堂と続きこの地特有の白い石灰岩製の石仏が安置してある。ほとんど崩壊したお堂も見られる。

川向こうに白菊酒造の醸造所があるが、備中杜氏の技で醸し出された地酒は吹屋の笹畝坑道の中で定温貯蔵されているという。県道に合流する所に、弓の名人為乗五良兵衛の墓碑が建っている。



下日名のとと道遺構歩き



石灰岩の石仏



妙見様=国土を守り、災いを消し、敵をしりぞけ、福を増す仏。

16. 下日名の大師堂。

とと道遺構は集落を抜けて山裾を辿っていたが今では藪となって消失している。手前で橋を渡り35号線に戻る。日名川が成羽川に合流する手前に、大師堂がある。横には2基の石碑が有り、ひとつは天保9年(1838)の牛供養碑である。さらに下ると成羽橋が見えてくる。渡らずに成羽の町に入る。



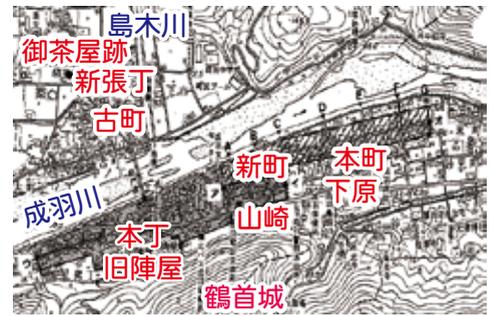
下日名の大師堂

成羽の町並

成羽は吹屋、新見との間の陸運と成羽川の水運の接点として昔から交通の要衝だった。文治5年（1189）に鶴首城が築かれ、以後城主は転変するが、江戸時代、明暦4年（1658）に5千石で入府した山崎豊治公が鶴首城の麓に成羽陣屋（御殿屋敷）を築き、成羽陣屋、武家屋敷、町屋地区の3地区で構成される新町を整備、現在の形になった。

以来山崎家が10代にわたり文政10年（1827）まで一帯を統治した。

町並は東西にのびる大通りと、南北に通じる7つの小路からなり、各小路の入り口には常夜燈が設置されていた。そのひとつの金谷小路の辻に建つ常夜燈は高さ280cm、建立は文政11年（1828）、金毘羅大権現を祀っている。



江戸期の成羽の町並



金谷小路
の常夜灯



大阪、筑前、岡山等の
舟問屋の名前が
刻字された玉垣



大神宮鳥居



2022.1ニケ像

17. 大神宮と玉垣

旧道沿いの中程に大神宮が祀られている。伊勢神宮の分社といわれ、鳥居に大神宮の額がかかっている。

境内の玉垣は安政4年（1857）頃各地の船問屋の寄進によって造られた。阿波、九州、大阪などの船問屋の名前もあり当時の成羽の広い通商圏が確認できる。

魚仲士達は早暁、魚籠を担いでこの道を通っていた。

18. サモトラケのニケ

成羽の市街地には2つの大曲が有り、西の大曲の手前にはかつて文化センターなど市の施設が有った。道路に向かってコの字型に建物が並んだ中央に台座が有り、そこに何とサモトラケのニケ像が有った。

ロードス島の人々がシリアのアンティオコスIIIとの戦いで勝利した折、勝利の神ニケに感謝して建てたと言われている像だ。女神の薄い着衣の巧みな「ひだ」の表現で知られており、高さ2.4mのギリシャ彫刻の傑作である。

市の施設は最近新設なった「たいこまるプラザ」に移り、ニケの周囲の建物はすっかり撤去された。青空をバックにしたニケ像は途端に神々しさを取り戻したかの様だ。

19. 恵比須さま

ニケの隣には祠や常夜燈が集まっている一画がある。明暦4年（1658）に山崎豊治公が領主として入部、「新町」を整備、商人達はこの恵比須宮を勧進、商売繁盛を願った。ここから下=東が新町、上=西が本丁となる。



恵比須様



ニケ復元想像図

20. 大曲りと成羽藩勘定所遺構

街道や市街地には時々大曲りという曲がり角がある。この角があると、長い行列が進む際後ろの方を確認できる。また、遠い山の上から眺めれば行列の人数が数えられる。ということで成羽市街には大曲りが2つある。西の大曲りの角には成羽藩勘定所があった。

年貢米の管理、高瀬船の運行と運上金管理、山林資源の経営管理など藩の主要業務を担う役所だった。それだけに堅固な建物で、現在は成羽町の指定文化財として保存されている。通りの西には屋敷門や陣屋町屋敷跡が続いている。



西の大曲り



旧成羽藩勘定所



21. 本丁神楽ロード

西の大曲りを曲がると「本丁神楽ロード」になる。成羽は備中神楽発祥の地であることから「神楽で町おこしをしよう」と、手作りの陶器製の神楽のオブジェを16体制作、この商店街沿いに演目順にならんでいる。神楽の太鼓の音が聞こえてきそうだ。

22. 運ばれた魚（河内鮮魚店）

本丁通りに河内鮮魚店という店がある。古い広告（引き札）と得意先に当てたお盆前半年の請求書が展示されている。店主によれば明治の祖父時代のものであるという。

請求書からは売上げ順に鯖、たこ、鱈（さわら）、えび、たいなど今も人気の魚の名前が読みとれる。請求金額は当時の料金で17円60銭（当時の米は1円12銭/10kg だったので米約160kg 相当とかなりの額である。

この請求書の宛先の名前から魚はとと道を通って宇治へ運ばれたものと推測される。

本丁神楽ロード出演者代表



半年分の魚代金請求書

23. 成羽美術館

昭和26年（1951）、旧成羽町町制施行50周年を記念して、後世に伝えるにふさわしいものを残すということから、当地出身の児島虎次郎の画業を讃え、その威徳を顕彰し、町民の憩いの場とするために、昭和28年（1953）8月、岡山県下第1号の町立美術館として開館した。

その後、児島家から画伯の絵画や古美術の寄託が有り昭和42年11月（1967）、2代目の美術館を開館、さらに平成6年（1994）10月、近代的設備の整った現在の美術館となった。

所蔵品は、画伯の絵画120点、オリエント地方、中国、朝鮮などの古美術507点、成羽の化石等500点にのぼる。建物の設計は立地の特性を活かし、コンクリート打ち放しの独自のスタイルを確立した建築家 安藤忠雄氏による。

(トイレあり)



河内鮮魚店



明治時代の魚屋の
宣伝チラシ



成羽美術館

④吹屋山岳コース（成羽→吹屋）

ガイド 番号	主要ポイント	全行程ウォークプラン			部分ウォーク+ 車伴走プラン	
		km	所要時分	備考	移動手段	所要時分
4-1	御殿屋敷跡	2	70		ウォーク	90
4-6	水道記念碑					
4-10	窓坂峠北下	4	80			
4-12	宇治への山道入口				車乗車	15
4-15	宇治元仲田邸	3	70	トイレ有り	ウォーク	110
4-20	笹尾城址	2	40			
4-21	延命寺	2	60	トイレ有り	車乗車	15
4-22	大塚坂	2	40			
4-23	吹屋の町並			トイレ有り	ウォーク	20
				合 計	ウォーク	220
					車乗車	30
	合 計	15	6:00			4:10



6. 水道記念碑と牛供養碑

堂の下の辻堂から約400m進んだ山側に水道記念碑が建っている。大正9年の建立で、「長さ715間、経費574円13銭（現在価値で@3800/円として現在価値で220万円?）、人夫200人」とある。このあたりは急傾斜の地形で、昔から水に不自由しており、集落全体で力を合わせて水を確保していたことがうかがえる。

雨乞いの龍王様が祀られており、旧のお盆には数百の松の根を燃やす習慣があったという。

その先に昭和27年7月建立の牛供養碑が現れる。



水道記念碑



牛供養碑

7. 深岨（ふかだわ）化石

成羽に産する貝化石は明治21年(1888) 成羽町深岨（現在の成羽町東枝）で採取されたことに始まる。

この貝は「エントモノチス・オコチカ」という2枚貝で2億年前の三畳紀後期の成羽の海で大繁殖し、この時代の終わりには絶滅しており、地層の時代を決める「示準化石」とされている。詳細を説明した看板が建っている。

そのすぐ先で広域農道と合流する。この広域農道が車道としては成羽から吹屋への最短コースで、とと道もここを通っていた。この辺から宇治町後谷まで民家は無い。

ほどなく右側に山道が現れ、車道を離れ、稜線に向かってこれを登る。



エントモノチス・オコチカ



広域農道との合流点



菊屋地蔵



牛馬水飲み場

8. 菊屋地蔵

稜線沿いの木々の間に菊屋佐治郎と刻字された地蔵尊が建っている。佐治郎は成羽の古町の商人で、吹屋への行商の途中、腹痛をおこし、ここで一命を落とした。その後、同人の為に建てられたもので「腹一切の病に靈験あらたかである」とされ、腹痛の折は地蔵に祈ると治ると言われた。

9. 牛馬水飲み場と番所跡

かつては牛馬に荷を積み、この急な坂道を山越えしていた。峠のあたりでは山崎藩の番人が交替で見張りをしていた。牛馬の水飲み場と番所跡が残っている。



窓坂手前から成羽望見

10. 窓坂峠

山道をさらに登ると視界が開け、遙か下に成羽の市街の眺めが広がる。前方の急な坂道を見上げるとぽっかりと空いた空間が窓の様に見えることから「窓坂峠」と呼ばれるようになったという。

他方、新見の殿様が参勤交代の折にこの道を通ると成羽の新張丁からは、窓の様に見えるこの坂を殿様一行が下ってくるのがよく見えたという。宿の人はそれから殿様を迎える準備をしたとか。そこで「窓の日越し」と言われ、窓坂峠と名付けられたともいわれている。



窓坂峠

♪” 吹屋よいとこ 金吹く音が
聞こえますぞえ 窓坂え “

狼遭難

明治初年の冬のある日、矢戸（吹屋坂本の北）の馬方が馬に炭を負わせて成羽に下る途中窓坂で狼が捕えた猪の肉を食べているのに出会った。狼はあわてて逃げたので、馬方は猪を横取りして成羽で売り飛ばした。日暮れて本郷（矢戸の北）行きの荷物を運んで現場にさしかかると狼が飛び出して馬に飛びかかってきた。

馬は荷物を振り落として一目散に逃げ、夜明けに矢戸の家に血みどろになって帰った。残された馬方は狼にかみ殺されてしまった。猪肉を横取りした仇討ちだったのだろう。それを聞いた成羽の古町の人が刀を携え現場に行くと狼が飛びかかってきた。それを一刀で斬り殺した。以後1ヶ月ほど他の狼がうなり続け、誰一人通行する者は無く、吹屋の町は閉口した。



実在は不明？

11. 一里塚跡

こんな逸話が現実味を帯びるほど山は深くなる。窓坂を越えると下りになり、下を通る広域農道と合流する。とと道遺構は農道を少し右に進んだ所から又林の中に入って続いており、ほどなくかぐら街道に合流する。

一里塚宝探し

成羽の総門橋から1里ほどということで、石垣を積み上げ、松を植え1里塚にしていた場所があった。

明治8年の暮れ、ある囚人がその松の下に盗んだ金を隠したが警察につかまり刑務所入りとなった。刑が重くて出所できないので、出所する囚人仲間にお前にやるから一里塚から金を持って行けと言った。

出所した囚人は探しにでかけたが場所が分からず村人に案内してもらった。そこに行くくと金があった。村人も分け前をもらったが噂が広まり、通る人々がまだ金が残っていないかと石垣を掘り崩して一里塚はとうとう無くなってしまった。



12. 宇治への山道入口

このあと1kmほどはかぐら街道の舗装道を歩くことになる。道が下り気味になり両側に森が迫ると右側に林道が現れる。入口に「吹屋往来 とと道」と書かれた看板が立っている。

とと道は昭和25年ごろには使われなくなり、道の管理も滞った。そのため松枯れ病による倒木と、ブナ科の常緑樹や笹類が繁茂し、通行は益々困難になった。

そこで、平成28年（2016）ごろから地元の有志が重機を使い藪を切り開き、「とと道」を再び歩けるように整備した。

しかしこの山中には縦横に山道が走り、とと道遺構の特定は困難だった。

吹屋往来繁盛の背景

この地区のとと道は一般的には吹屋往来とも呼ばれ、山道にもかかわらずよく利用されていた。

- 例えば、
- ・天明の大飢饉の時、津山藩主が住民の為に米三百石を吉井川→玉島→高梁川→成羽→吹屋経路で送り、多くの住民を救済した。
- ・新見藩主の関氏は参勤交代の折にはたびたび成羽経路の舟と陸路を使った。また、松山藩が新見藩所属の舟の継舟制を禁止したため成羽経路の舟と陸路を利用した。

ほかにも多くの物資が人馬の背に乗ってこの道を通って運ばれていた。瀬戸内海からの鮮魚や海産物もこの道を利用して吹屋へ運ばれた。

13. 宇治後谷への東・中・西3ルート

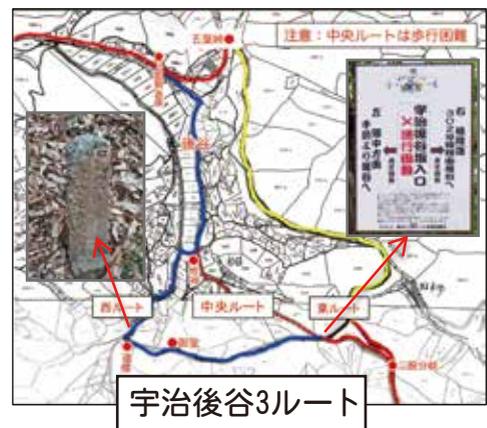
林道は一箇中に整備され森林浴を楽しみながら歩くには恰好のルートである。しかし、上空を高圧線が走る開けた場所を過ぎてほどなく、道が二股に分れる。

右＝東に行く（右図の黄線）とやや登った後に下って302号線に出る。そこから道なりに五葉峠に出れば宇治は近い。

左＝西に向かい（青線）、山中をほぼ水平に進むとほどなく右側から踏み跡が現れる。先に別れた東への道に通じる道だ。それに構わず進むと右側に「宇治後谷坂入口X通行困難」とした新しい看板が現れる。急な稜線を後谷に直接下る道（赤線）だが、下部の倒木が多く歩行は困難であり当協議会で設置した。

このためそのまま西へ進むと途中お堂があり、下ると里道に出る。出口左手には「右なりハみち 一里半 左松山三里半」と刻字された道標が現れる。東西に通じる道は宇治から松山へ向う道で本来のとと道と山中で交錯していた。

東の五葉峠と西の後谷ルート、どちらから進んでも85号線に出ることになり、時間的にはさほどの違いはない。とと道の雰囲気を楽しみたいと思えば西の道がお勧めだ。



山中の二股



後谷地神



後谷南山四つ堂



宇治後谷（北から）



遺構の牛馬供養碑

14. 麦の家と牛馬供養碑

深い山を抜け県道85号線の舗装道路を歩くといささかほっとする。県道と並行してやや上の斜面をとと道遺構が続いている。道脇には「右 成羽、左 たい」と刻字された3面の牛馬供養碑がある。県道に戻り宇治に向かうと元の備北農協施設を改造した「麦」という休み所が現れる。

地元のボランティアが運営、大人数の場合は事前に予約すれば休憩が可能。（トイレあり）

15. 元仲田邸

江戸時代の庄屋を引継いだ明治中期建築の住宅。酒蔵を改修し、研修宿泊施設「備中宇治 彩りの山里」として活用されている。珍しい「囲炉裡（いろり）の間」があり、土蔵は資料館として整備されている。庄屋の伝統を伝える建物である。

16. 常夜燈

宇治の町に入ると製麺屋の前に立派な常夜灯が建っており、金毘羅大権現と刻字されている。高瀬舟で金毘羅様にお参りしたという記録もある。

宇治と城跡

宇治町は南北10km、東西6kmとさほど広くはない。そこに滝谷城、笹尾城、しらげが城、丸山城と4つの山城跡が有る。中でも滝谷城主の赤木太郎忠長は承久の乱での功績により信濃から備中国川上郡穴田郷の地頭として着任、以来300年にわたって一帯を支配した。関ヶ原の戦い以降は毛利に臣従している。赤木家家宝「赤韋威（あかがわおどし）大鎧・兜」は今日まで伝えられ国宝に指定されている。笹尾城主・近藤掃部（かもん）介は備中兵乱時、三村方につき戦死している。



麦の家



製麺屋前の常夜灯



元仲田邸

17. 石田の辻堂

元仲田邸や常夜灯を過ぎ北に進むと葡萄畑の脇に辻堂が現れる。近くに地神もまつられている。一休みするには恰好の場所だ。

18. 石田五輪塔

宇治町石田のしらげが城（城山）の麓に小さな毘沙門堂があり、堂内に聖観音が祀られている。高さ1.7mの大きな白石五輪塔やこれに匹敵するもの2基、ほかにも20基ほどの五輪塔がある。

その内の1基には北朝年号の応安4年(1372)の銘が入っている、承久の乱後に地頭として穴田郷に勢力を有した赤木一族の墓塔と言われている。

19. 島木川とびそ跡

五輪塔から先になると田んぼのあぜ道の様な所を進むが、谷が狭まり前方に堰堤が現れた地点で、足元に気をつけながら島木川の自然岩盤でできた「とびそ」伝いに左の対岸に渡ろう。

無事渡ったあとは小さな集落の中を北に抜け、今度は橋で再び対岸に戻ることになる。

20. 笹尾城址跡

橋を渡り前方の小山に向けてコンクリートの道を登る。小さな集落を過ぎ左方向の茶畑の中を進む。このあたりの茶は、京都の宇治茶と同じく小さい葉の品種であるらしい。同じ宇治ということで何か関係があるのだろうか。

森の中の頂上には社が有り、その回りに無数の五輪塔が散乱している。どんな歴史が有ったのか気になる眺めだ。笹尾城址から下ると集落の裏から延命寺への急な登りとなる。

注意!

ここから下谷にかけて稜線を辿る延命寺ルートは毎年9~11月末の間の3ヶ月は山林地権者の私権保護のために通行禁止。その場合には集落から県道85号線に下り、島木川沿いの車道ルートを吹屋に向かう。



石田の辻堂



石田の五輪塔



水路の脇を行く



堰堤に阻まれる



島木川をとびそで渡る



笹尾城址に散在する五輪塔



島木川を橋で渡り笹尾城址を目指す



対岸の集落の中を抜ける

21. 延命寺

延命寺迄は山道を約2kmということで、これ迄の疲労も重なり楽ではない登りとなる。途中あちこちに様々なスタイルの石像が有り、それを観察しながらゆっくりと登ろう。

最後の坂を登りきると突然あたりが開け延命寺が見えほっとする。この寺は永平寺で修業した住職の精進料理で知られていたが最近はそのサービスは無くなったようだ。

若杉山と号する曹洞宗の寺で、永世2年（1505）の開基と伝えられている。当初は密院であったが廃絶し、福知山城主 朽木八郎岩国公によって再建された。山門は天正6年（1578）建立と言われる。元禄年間に荒廃した銅山を再興した大阪の豪商「泉屋」（後の住友）も梵鐘を寄進している。

境内には「享保15年（1730） 戌7月小吉 念仏講中下谷 白石大深」と銘のある手水石が置かれている。大深は現在はさびれているが、大深千軒とも言われ、吹屋銅山の発祥の地とされている。境内の左外れに**トイレ**がある。



石積みの上の地藏尊



様々な石像



急坂の登山道

22. 延命寺の道標

延命寺から北西の坂を下ると吹屋の下谷地区に下り着く。県道85号線と交叉する地点には「当国巡礼第十番 従是成羽江三里半 新見江四里余 明治23年3月建之」と刻字された方形の道標が建っている。

ようやくにして吹屋の領域に入ったことになる。

23. 大塚坂

県道を100mほど進み、左に曲がり、大塚屋敷横から大塚坂と呼ばれる谷筋の坂を登る。吹屋への最後の坂である。

旧大塚屋敷

下谷地区には銅山事業で隆盛を極めた大塚家の豪邸（今は廃屋となっている）と墓所がある。

吹屋鉱山は大同2年（807）に開坑された。吹屋が尼子氏の所領となった享禄5年（1532）、武将 吉田六郎兼久が黄金山に砦を築き、その配下で大塚孫一等が銅山経営を請け負った。

その後銅山の管轄は毛利、豊臣と変遷し関ヶ原合戦以降は小堀遠州が管理、それまで徳川家の「御手やま」であった吹屋銅山を吹屋村に払い下げ、村人に経営させる「村稼ぎ」の形に切り替えた。その元締めを地元の有力者で銅山経営の経験の有る大塚伊兵衛に命じた。その後管轄は変わるものの、大塚家が幕末頃まで経営に関係した。



延命寺



延命寺道標



現在の大塚屋敷（廃屋）



大塚坂登り口



吹屋下谷町並

24. 吹屋の町並み (500m)

吹屋は昭和52年（1977）に岡山で初めて「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されている。

この町は、江戸時代から明治にかけて、日本有数の銅山町として栄え、さらに江戸時代末期からは、ベンガラの国内唯一の生産地としてより一層繁栄した。往時は、銅、鉄、薪炭、雑穀を集散する問屋やベンガラの商家が軒を連ね、江戸時代末期から明治初期の建造物が多くを占めている。

赤茶色の石州瓦と妻入り、ベンガラ壁、そして格子に代表される貴重な町並みである。最近出来た公民館や郵便局も外観をその景観に合わせて建てられている。令和2年（2020）にはジャパンレッド発祥の地として日本遺産にも指定された。（トイレあり）



吹屋の町並み



牛馬を繋ぐ
鉄環

旧片山家

牛馬を繋ぐ鉄環

吹屋は輸送の中継地で毎日数十頭の牛馬が集まり賑わっていた。おかげで町は牛馬の糞尿の臭気にもあふれていた。問屋の軒先には、牛馬を繋いだ鉄環があった。今でもそのままに残って往時が偲ばれる。

♪場所じゃ場所じゃ吹屋は場所じゃ 東城やせ馬来る場所じゃ

25. 郷土館・旧片山家

町並みの中心部の郷土館は、5年の歳月をかけ明治12年に完成した吹屋商人の家である。妻入りの入母屋造りで塗込め造りとベンガラ格子の代表的な建物で石州の宮大工の手で造られた。

道を隔ててある旧片山家住宅は200年余にわたってベンガラの製造、販売を手がけてきた豪商の住宅である。母家と共にベンガラ製造にかかわる附属屋が立ち並んでいる。国の重要文化財に指定されている（屋号 胡屋）



郷土館



三菱商会
マーク入りの
玉垣と山神社

“吹屋よいとこ 金吹くところ 掘れば掘るほど 金が出る”

26. 山神社（本山神社）

千枚に入り20m進むと現在資料館になっている旧吹屋町役場が右手にある。その先に銅山祭神の山神社（本山神社）がある。狛犬の祀られている石段を登ると、明治6年に銅山の経営を引継いだ三菱の社紋の入った玉垣がある。

本殿は銅山を運営していた大塚氏が建立したと言われている。山神社の先で町並みは途切れる。



吹屋名所案内

吉岡銅山

吉岡（吹屋）銅山は大同2年（807）に発見された。明治6年に三菱商会が銅山経営に着手、技術革新による経営近代化を進め、明治44年に最盛期を迎えた。当時は従業員1590人（明治37年）、銅の生産量1042トン、全国屈指の大銅山であった。

しかし、大正時代末期から景気が後退、昭和恐慌により吉岡銅山は昭和6年休山、戦後に再開したものの、昭和47年に廃業した。

笹畝坑道

江戸末期頃に開発された笹畝鉱山の本坑道の跡が残っている。明治12年に三菱商会が経営する吉岡鉱山の支山となり、大正末期まで操業していたがその後休山、昭和52年のふるさと村事業で一部復元整備され、一般に公開されている。

広兼邸

享和、文化の頃（1800年頃）小泉銅山（成羽町）とローハ（硫酸鉄）の製造により巨大な富を築いた大野呂の庄屋だった広兼氏の邸宅がある。

江戸末期に建てられた楼門作りで、城郭にも劣らない堂々たる石垣は今も当時の富豪ぶりを伝えている。映画「八つ墓村」のロケが昭和52年と平成8年の2度にわたり行われた。

西江邸

宝暦元年（1751）、高品質のベンガラの基となるローハを生産する本山鉱山が西江氏により開坑された。生産は維新政府の殖産興業政策の波に乗って発展、日本全国に名をなした。立役者西江氏の邸宅は正徳年間（1704-1715）に創建された豪邸である。

吉岡銅山トロッコ道

坂本から田原を経由して成羽川沿いにトロッコが走っていた。吹屋で採掘された銅鉱石を成羽の古町フラット

（トロッコ退避と荷物の積み込みをする場所）まで運ぶ路線。この道の敷設は難工事で多数の犠牲者が出た。供養と工事の安全祈願のため石灰の岩壁に「南無妙法蓮華経日蓮大士」と刻字されている。

明治41年に成羽～田原間の16kmが完成、成羽から高瀬舟で現総社市まで運んだ。大正8年には田原から銅山までの7kmが開通した。

明治36年の水力発電所の完成により、電化が進んでおり、坑内から鉱石を運ぶトロッコは電車が牽引していた。

旧吹屋小学校

明治6年（1873）に開校、同42年（1909）に江川三郎八設計になる本館が誕生、平成24年3月まで現役最古の木造校舎として使用されてきた。

最盛期の明治7年（1918）には生徒数は350人を記録した。閉校後平成27年（2015）から7年に渡って保存修繕工事が行われ、令和4年（2022）に新たな観光スポットとして蘇った。



笹畝坑道



広兼邸



西江邸



吉岡銅山トロッコ道
写真集「岡山県民の明治大正
山陽新聞社発行より



旧吹屋小学校

吹屋の町並みに何と「とと道カレー」なるメニューを提供するお店TSUKUSHIがある。是非訪ねてシーフードカレーをお試し願いたい。



TSUKUSHI
soup curry shop

OPEN 11:00～14:00
CLOSE 水曜日
高梁市成羽町吹屋721
TEL 080-2940-9540

別冊地図の内容と使い方について

1. 内容

国土地理院GSIMapsを利用してその上に独自にとと道関連情報を追加してとと道案内図を作製した。

ルートが複雑で分かりにくい場所では地図を拡大の上必要な情報を追加した。A3サイズ4枚で笠岡-吹屋の全域をカバーしている。表面には5地域の全体図、裏面には各地域内の部分拡大図を配した。

- 1.表 笠岡・金浦-笠岡・甲弩(こうの) +裏 4地点拡大図
- 2.表 矢掛・小田-美星・毛野+裏 3地点拡大図
- 3.表 美星・毛野-成羽・上日名(保木上橋) +裏 3地点拡大図
- 4.表 成羽・上日名-宇治への山道入口 裏 成羽-吹屋

2. 使い方

■5地域全体図(表面) :

縮尺: 地図の3cm=実距離のほぼ1km相当

トレイル表示の意味:

A 

歩行を推奨したいとと道遺構。但し山の中では6-11月にかけては草刈りがされていないとルートが分からない部分も有る。冬期は毎年草刈り予定。

B 

とと道遺構として確認されているものの草刈り等の管理が難しく、ウォーカーが自ら藪漕ぎ等をしながら歩く覚悟が必要な道。地権者が季節によっては通行を禁じている道。

C 

とと道が消え舗装道路等になっている部分。当然歩けるが距離の長い部分も有り、車に乗って通過するのがお勧め。一般公開ウォーク行程ではこの部分では伴走車への乗車を織り込んでいる。

■部分拡大図(裏面) :

全体図では分りにくい部分を拡大して表示。ルートは赤線で明示(除く後谷。私有地を通る場合も有り要注意(コースガイド④-20等参照)。

備中とと道トレイル推進協議会賛助会員募集について

当協議会の設立経緯でふれた様に、2020.7月にそれ迄の関係者を糾合し、会員を募集し協議会を設立しました。

当協議会の事業は規約（添付）に明記されていますが大きくは、

- ①トレイルコース整備事業
- ②一般公開ウォーク事業
- ③とと道関連情報提供

の3本柱となっています。この内、②③の事業については皆様の参加により対応できる状況になっておりますが、①については毎年全コースにおいて秋の草刈りが欠かせず、その役員人材、経費財源を独自に確保する必要があります。

このため、毎年とと道トレイルコースの紹介、整備維持のために会員を募集しております。事業趣旨にご賛同いただければ、会員申込書に必要事項記入の上賛助会員会費¥1000/年を添えて登録をお願いいたします。

登録にあたっては下記の入会申込書をコピーして必要事項を記入の上、地区ごとに配置された役員、あるいは事務局宛にご連絡をお願いします。

また、会のHP (<https://www.totomichi.com>) のINFOからも登録申請は可能です。

備中とと道トレイル推進協議会規約（抜粋）

名称
第1条 この会は、備中とと道トレイル推進協議会（以下「本会」という）と称する。

目的
第3条 本会は、笠岡市金浦から高梁市成羽町吹屋まで、明治～昭和初期にかけてリレー方式で魚貝類を運んだかつての往来、通称「とと道」の再生、利活用を通じて、地域の歴史、文化、生活情報の収集、トレイルウォーク実施、観光振興と地域間の連携を図り、「とと道」を後世に伝えることを目的とする。

事業内容
第4条 本会は、目的達成の為に次の事業を行う。
①とと道の調査、トレイルガイド冊子、関連書籍等制作。
②とと道の整備、道標等の設置。
③とと道の広報活動、ウォーキング等の企画・実施。
④とと道沿道学区の生徒へのとと道紹介、整備支援への参加促進。
⑤とと道ガイド育成講座開催（細則別途規定参照）。
⑥その他本会の目的を達成するために必要な事業。

組織と役割
第5条 この会の会員は次の2種類とする。
①正会員は、本会の目的に賛同し、入会登録を行い事業運営活動に参加する者とする。
②賛助会員は、本会の目的に賛同し、入会登録を行った者とする。

入会
第6条 会員として入会しようとする者は、入会申込書、会費を添えて会長あてに提出し、会長の承認を得るものとする。

会費
第7条 会員は総会において定める会費を納入しなければならない。
①正会員 ¥2,000（入会金 ¥1,000 年会費 ¥1,000）
②賛助会員 ¥1,000（年会費 ¥1,000）

入会申込書

備中とと道トレイル推進協議会会長殿

活動の目的に賛同して、会費を添えて入会を申し込みます。

令和 年 月 日

氏名 _____ 男 女

生年月日 _____

住所	〒
自宅電話番号	
自宅FAX番号	
携帯電話番号	
メールアドレス	
自動車免許	有 無
会員の種別選択	正会員 賛助会員
備中とと道推進協議会に対する要望等	
備考	

申込書は地区内役員に提出するか下記まで郵送あるいはメールをお願いします。

〒714-1215 岡山県小田郡矢掛町中1208
備中とと道トレイル推進協議会事務局 金子晴彦宛 bjsmnt05@yahoo.co.jp

地域担当役員

笠岡：塩田宏之 笠岡市走出4406 090-3881-7915
 矢掛：守屋和幸 矢掛町小田732-5 080-2888-2329
 美星：西田秀夫 美星町星田18-17 090-4690-7594
 高梁：小見山節夫 高梁市浜町1285-1 090-4805-3659
 事務局：金子晴彦 矢掛町中1208-1 080-3390-6935



とと道ホームページ

<https://www.totomichi.com/>



備中とと道トレイルガイド・コラム案内

p14	金浦漁獲情報（大正7年金浦町史等による）	p29	新しい道標
p16	ヒッタカとオシグランゴ （昭和53年 笠岡市教育委員会発行 ヒッタカ等による）	p32	美星の仲仕（なかせ）仲継ぎ場と 仲仕問屋（美星町史による）
	道と道標と辻堂 （平成28年 矢掛町教育委員会発行 矢掛町のつじ堂P73）	p36	霊場四字四国
	ミニ霊場ととと道 （平成27年金浦歴史研究会発行 笠岡市内のミニ霊場による）	p37	西林國橋先生略伝
p17	聖地 助実地区	p38	成羽の町並
p20	薬師様道と走出薬師	p41	高瀬舟
p21	折敷山城址	p43	狼遭難（昭和46年「窓坂」 徳森勝子編集より） 一里塚宝探し（同上） 吹屋往来発達の背景
p22	甲弩地区とと道遺構推定	p44	宇治と城跡
p23	井笠鉄道	p45	大塚屋敷跡
p25	小田郡郡衙（ぐんが）の影	p47	牛馬を繋ぐ鉄環
p27	宇内のホタル養殖	p48	吹屋名所案内
p28	とびそ		

あとがき

このたび「備中・とと道トレイル笠岡-吹屋60KM全コースガイド」の増補改訂版を発行することができました。主な内容は次のとおりです。

■全コース60KMを地理的観点から4コースに大別し、どのコースでもお好みでウォークできるように編集しました（駅からウォークも可能です）。

- ①瀬戸内コース（笠岡・金浦-小田川）
- ②里山コース（小田川-美星・三山）
- ③吉備高原コース（美星・三山-成羽）
- ④吹屋山岳コース（成羽-吹屋）

■それぞれのコースの探索概略が一目で分かるように一覧表にまとめました（P12）

■各コースごとに地域の特色や史跡解説を見直し、詳しい解説が必要な場合は「コラム」覧を拡充、解説しております。

■A3版の地図（国土地理院GSIMaps）を利用して4コースそれぞれのルートを書き込み、コースの全体が目で見えて分かるようにしました。4枚の地図を別冊としてまとめて本体に差し込んでいますので御活用下さい。編集にあたっては各コース2名の現地担当者が増補・改訂原稿を執筆し、それを編集委員長が統括して全体原稿をとりまとめました。

末筆になりますが、この事業は公益財団法人「福武教育文化振興財団」の助成により実現しました。130余名の協議会会員と共に深く感謝の思いを捧げます。ありがとうございました。

令和4年10月吉日

編集メンバー（南から）：北村卓士、森山上志、塩田宏之、守屋和幸、金子晴彦、西田秀夫、池尻雄策、金高常泰、佐野金司、徳森勝造、戸田誠、小見山節夫

内容についてのお問い合わせは「とと道HPのinfo」からご連絡下さい。事務局が対応します。

路傍の道案内人達



1-10 右 ようすな



2-2 みきハ まつ山 なり八道



2-5 右矢掛 左三山 高梁



2-19 右小田矢掛 左舊道



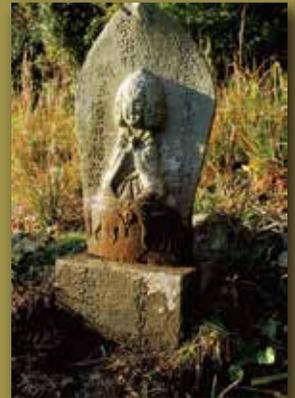
2-25 右三山 成羽 吹谷



2-26 右まつやま道 左なりわ道



3-13 右なりハみち 左松山



3-14 右成羽 左たい

道中 記念 or 祈念碑達



1-1 出買連中



1-5 吉濱干拓記念碑



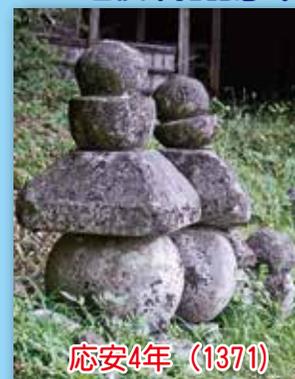
3-4 痰咳神



3-17 舟問屋玉垣



4-6 水道記念碑



4-18 石田五輪塔



4-13 後谷地神碑



4-26 三菱商会玉垣